# K-ON <Backroom Story>

グラッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｋ－ＯＮ　＞Ｂａｃｋｒｏｏｍ　Ｓｔｏｒｙ＜

【Ｎコード】
Ｎ７６０９Ｚ

【作者名】
グラッド

【あらすじ】
少子高齢化とか何とかのせいで今年から共学になった桜が丘高等学校に入学した邑園結祐（むらそのゆうすけ）。
彼にはちょっとした問題があり・・・・。
そんな結祐が軽音部のメンバーや、先輩、友達と紡いでいくお話です。

不定期更新、若干キャラ崩壊してるかも、漢字間違いたまにある

かもですが興味が少しでも湧いたら読んでみてください＞m（__）m＜

## 第一話　？PROLOGUE？（前書き）

初投稿です。

感想をいただけるとうれしいです。

# 第一話　？PROLOGUE？

いつからだろう？
こんな体質になったのは。
これのせいで俺は中学時代毎日が修羅場だった。
治そうとも試みたけどうまく治りきらなかった。
だから、俺はもう決めたんだ。

そう、俺はもう女子なんぞには関わらない！！！

♪♪♪♪♪

桜が咲き誇り、誰もが様々な思いを掲げて新しくスタートを切る4月。
『彼女を作る』『部活に打ち込む』『受験』『まぁ、頑張る』などなど、様々な目標をもち心地よい風に吹かれている新入生の中、今日から晴れて桜が丘高校に入学した俺、邑園（むらその）　結祐（ゆうすけ）はクラスの面々を見て絶望していた。

「な、何でこんなに女子率が高いんだ？」

思わず口に出してしまった。
だがまあ仕方がないはずだ。
だって、クラス35人中30人が女子なんだし。
ただここで俺が普通の男子と違うのは、喜ぶべきこの状況に絶望しているところだ。
では、なぜ絶望しているかと言うと、俺はメチャクチャ女子が苦手なのだ。
どの位かと言うと、目が合うだけで脳内がフリーズして頭から煙

を出しちゃうくらいニガテだ。
つーわけで、ガッツリＢｌｕｅになっていると、クラス内で数少ない希少種であるはずの男子から、
「何でって、ここ去年まで女子校だったからじゃない？」
と、まさかの返答が返ってきた。
若干驚いたけど、その声は非常に聞き慣れた声であり、そして同時に俺をこの状況にしやがったヤツだと確信したので、俺はにこやかスマイル＋額に青筋でその声の主を見（睨んだ）た。

「テメェ知ってて俺をここにいれたのか・・・・勇利」
「まぁね～。だって、女子率９０％以上だよ？行くっきゃ無いっしょ？」
「よく堂々と不純な入学動機叫べんな・・・って、勇利のそんなことは今に始まったことじゃねぇからどうでもいいんだ？勇利、お前俺がメチャクチャ女子苦手なのも、高校ではあまり女子と関わりたくないって願望も知ってんだろ？」
「だからここに誘ったんじゃん！ここなら結祐の女子がニガテなのも半強制的に治るじゃんｗｗ」
「志望校をお前に相談したのが間違いだった。そして笑うな」
「まぁまぁ、でも考えてみなよ、３年間女子と戯れ放題だよ？バレンタインなんか学年女子全員から告られたりしてさ、『ごめん皆、僕はみんなに対等に愛を与えることが使命なんだ。だから誰か一人なんて選べないよ』とか言っちゃったりしてさ、そしたらさ、・・・グフ・・くふふふふふ・・・・・」
この妄想族がと呟きながら勇利の顔をみたが、その顔は気味悪く歪み、すでに俺の悪友篠原勇利（しのはらゆうり）の顔ではなく不純な考えを膨らませ

た変人、いや、もはや不純物だ。

こいつ絶対彼女できねぇだろーな。

・・・・俺もだった。

なんせ声かけらただけでもショートしちま・・・・

「あの～・・・・」

ボンッ？（ショート音）

「えぇ？だ、大丈夫ですか？」

「あー、こりゃもうダメだ」

「ダメなんですか？」

「あ、え～と、こっちの話だよ。それよりも、確か君は平沢憂ちゃんだっけ？」

「あ、そうです！私平沢（ひらさわ）憂（うい）です・・って、まだ自己紹介もしてないのになんで名前知ってるんですか？」

「当たり前だよ！これから一緒に過ごす仲間（の可愛い女の子）の名前と顔くらい名簿と出席番号で確認しておくさ。あと、遠慮して敬語なんてつかわなくていいよ」

「そっか。でも偉いんだね。きちんと最初に名前を確認しとくなんて」

「いやいや、そんなの（僕の輝かしい未来のために）あたりまえだよ！！」

「ふ、不純な動機が見え隠れしてんのは気のせいか・・・・？」

「おお！結祐！いつの間に復活した！？」

情けないが今です・・・・なんて恥ずかしくて言えねー。

っつか、どうにかならんかな？この体質っつーか性格。

話しかけられてショートは情け・・・・

「よかった～！さっきはゴメンね！！」

・・・・あ、謝らなくていいから、話しかけない――――ボンッ！！

「えぇ！？また！？」

「頑張ったな結祐。３秒耐えたぞ」

「ご、ゴメン。私さっきからなにが・・・・」

「あぁ、憂ちゃん気にしなくていいよ。これはこいつの体質みたいなもんだから。・・・・とっ、とにかく、俺は篠原勇利。んでコイツは邑園結祐。僕たちは中学生の時からの友達なんだけど、実は結祐は極度の女恐怖症っつーか、超恥ずかしがり屋？それとも体質なのか？ま、まぁとにかく女子に話しかけられたり、目が合っちゃったりするとこんな感じに頭から煙を吹いてショートしちゃうんだ」

「そ、そうなんだ・・。じゃあ、何でこの高校にしたの？ここ去年まで女子高だったんだよ？」

「それはまぁ、僕が誘ったんだけどさ。女子が多い環境にいれば治るかな～的な感じで。・・・・・・でさっ！！」

「な、なに？」

「憂ちゃんさ、コイツのこの性格みたいなの治すのに協力してくれないかな？僕ここにいるけど実はこのクラスじゃないからさぁ～。お願いっ！！」

「（えぇ！？クラス違うんだ！）う、うん。いいよ。席も隣だし」

「それじゃあ、憂ちゃん！後は頼んだ！！」

「え、ちょ、ちょっと・・・・」

そうだ勇利！ちょっと、ちょっと待てぇ！！

と、言いたいのにショートしてて身体が動かない！！

くそぉ、勇利め、何で男子じゃなくて女子に頼むんだ！？

「あの――――――」

「だぁ！！それ以上なんも言わないで！！と、とにかく勇利が変なこと言ってゴメン！それと、改めて俺は邑園結祐。よろしくな平沢」

「憂でいいよ。こちらこそよろしくね結祐くん」

「下の名前で呼ばれた・・・・・」

「ん？何か言った？」

「なにも言って――――――――ボンッ！！」

「えぇ！？ご、ゴメン結祐くん。私今度はなにがまずかったの！？」

こうして、女子が得意じゃない俺の、元女子高での『甘くなくて、ほろ苦い』・・・要は苦いだけの青春がスタートしてしまった。

## 第二話　？部活見学！！？？（前書き）

戸惑いながら書いてます。

至らない点あったらお知らせください。

また、感想をいただけるとそれを励みにして頑張ります！！

## 第二話　？部活見学！！？？

俺、邑園結祐（１５歳）は女子がニガテという非常に残念な男子（ｂｙ篠原勇利）らしい。

しっかぁ～し！
俺は進化した！！

「結祐くん部活決めた？」
「まだだけど、憂は？」
「私もまだなんだ。だから、今日の放課後部活見学に行かない？」
「見学かぁ、俺も部活はやろうかなぁと思ってたから一応大体の部活は行ったんだけど・・・。先輩が全員女子だから部員が多すぎる部活は厳しいし。運動部じゃ試合に出れないしさ・・・」
「そっかぁ・・・。あ！じゃあさ、お姉ちゃんのいる軽音部に行かない？」
「軽音部って着ぐるみでチラシ配ってたやつ？つか姉がいるんだ」
「うん。ニワトリとかの着ぐるみで頑張ってた部だよ。あ、でも心配ないよ。お姉ちゃんはふわふわぽかぽかしててすごく可愛いからきっとおもしろいよ！」
「軽音部じゃなくて憂の姉ちゃんが？」
「うんっ！！・・・・も、もちろん軽音部のほかの先輩もいい人だし、おもしろいよ！」
「ふ～ん。じゃあ行ってみるか」
「うん！じゃあ私、他の友達も誘ってくるね」
「おぉ、りょ～かい」

そう言って俺は歩いて行く憂を見届けた。

この会話と見送り、合わせて約5分。
入学して1週間。
憂のおかげで、俺は眼さえ合わなければ5分は喋れるようになった。

ただし、喋り終わると――――――ボフン！！

「・・・・せんせー。邑園くんが頭からけむり出してまーす」

しょ、ショートします。

?.?.?.?.?

と、いう訳で放課後。
俺は憂とその友達の鈴木（すずき）　純（じゅん）と一緒に軽音部が活動している音楽室へ向かっていた。

・・・・一緒というには少し離れて歩いているけど。
だって・・・

「結祐はなんでそんなに離れて歩いてんの～？憂で耐性ついたんじゃないの？」
「それは憂限定なんだよ！そして下の名前で呼ぶな！俺を見るな！！」
「え～、いいじゃん結祐～。私のことも純でいいからさぁｗｗｗ」

そういいながら近づいてくる純。
後ろで憂が「じゅ、純ちゃんそのへんにしておかないと・・・・」といってるがお構いなしだ。

俺だってそれを黙って見ているわけじゃない。
即座に後ずさりを開始！！
したかったが、既に『会話をする』『下の名前で呼ばれる』『目があってしまった』の３つの攻撃により、ＨＰが残り少ない俺はけむりさえ出ていないものの、身体の主導権がもう無かった。
ど、どうすれば・・・！？と、そうこうしているうちに、ついに純が俺の目の前に立った。
それだけならなんとか耐えられるものの、目を逸らして下を向く俺を覗き込んできたんだからもうアウトだ。
くっ！耐えるんだ邑園結祐。
お前は進化しただろ！
耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ・・・・・・・・・。
そう呪文のように脳内で反復している俺などお構いなしだと言わんばかりに純は再度俺の目をジッと見つめた。
が、脳内反復していて反応のない俺に飽きたのか
「なんだぁ～。大丈夫じゃん。つまんないな～」
と、ついに覗き込むのをやめた。
丁度その瞬間。
俺の身体に異変が起きた。
一方、俺の反応の薄さに飽きた純は大きなあくびをしつつ憂を見たのだが、

「じゅ、純ちゃん・・・・・！！」
「え？どうしたの憂？」

その憂の青ざめた顔と、指差す手の震えに異変を感じ急いで再度振り返った。

また、純が再度振り返るまでの短い間に、ショートするのを我慢した俺は（恥ずかしさやらなんやらの）消化不良が起きて、

・・・・・ぽたっ。

「『ぽたっ』？何の音？」

「・・・・・ぐっはぁっっ！！」

口から血を盛大に吐き出した。

「吐血ぅ！？あ、『ぽたっ』って血のたれた音か～」
「純ちゃん納得してる場合じゃ・・・・」
「へぇ～、やっぱり結祐はおもしろいね。まさか、ショートで済まないくらいの攻撃加えると吐血するなんてｗｗ」
「あ、悪魔だ。純は癖毛の悪魔だ・・・・うっ！」
「ちゃっかり名前で読んでんじゃん」
「お前が呼べって言ったんだ・・・・ぐふっ！」
「意外と純粋か！？っていうかあんま無理しないほうがいいよ」
「それ純ちゃんが言えることじゃないと思うよ・・。結祐くん、保健室行く？」
「だ、大丈夫。それより音楽室行こうよ」
「そうだね。そうだ、結祐歩くの手伝ってあげるよ～ｗｗ」

ぱしっ（純が俺の手をつかんだ音）

「・・・・・・」
「あれ？反応なし？」
「純ちゃんそろそろやめてあげようよ・・・・」
「いや、これでやめるつもりだったんだけど・・・・。ついに覚醒したの――――――」
「あが・・・・」
「「『あが』？」」

「あががががががががががががががががががががががががががががががががががががががががが・・・・・・・・・・・・・・ガクッ」

「・・・・どうしよう憂？」
「と、とりあえず離れて見てれば・・・・」
「はっ！！」
「「結祐（くん）！！」」
「お、お花畑と手招きしている少年が見えた！」
「ごめん。あたしが悪かった」

謝るなら最初からやめてくれ。
もう手遅れなんだよ・・・・グスッ。

「本当に大丈夫？結祐くん」
「ああ。ただ、こっから音楽室まで少し離れて歩いてくれたりすると助かる」
「合点了解です！！」
「純は視界から消えるくらい遠くを歩いてくれると俺は喜ぶぞ」
「う・・・それはひどい」
「嘘だよ。ほら行こうぜ。憂、純」
「うん。そうだね。行こうか純ちゃん」
「うん！軽音部ってカッコヨさそうだな～」

・・・・俺への罪悪感はもう消えたんかい。
と、うんざりしつつ俺は憂と純が歩き若干距離が開くと再び歩き出した。

・・・・・・ほんとにこんなんでこの学校で3年間生きていけるのかな、俺・・・。

？？？？？

ついに音楽室についてしまった。
ま、正確には音楽準備室だけど、軽音部の活動拠点なのには変わりないな。

正直なトコロ、俺はここ数日の部活見学でいい事は1つも無かった。
というか、割と最初の段階で精神が冥界にトリップしてしまったので記憶がない。
なので部活の雰囲気なんかは俺を散々振り回してくれた勇利に聞いたんだけど、『結祐ってば終始ニコニコして一言もしゃべらないもんだからよっぽど感動したんだねｗｗｗ』となぜか見学内容では

なくこんなふざけたこと言いやがった。
その時は『っつか、そもそも質問の答えになってねえよ』とツッコミを入れることすら忘れてたなぁ・・・。

もちろんそのあと勇利(バカ)はキチンと成敗したけど、結局話しは聞けずじまい。
覚えているのは意識が戻るたびに再び冥界に引き込まれるという無限ループのみだけで・・・・・思い出したら気持ち悪く・・・・・うえぇ。

ということでぶっちゃけ軽音部に行くのも嫌だし、部活に入るつもりも全くない！！
でもまあ憂の好意を無駄にするわけにはいかない！ここまで来たけども、

「結祐くんドア開けるけど大丈夫？」
「だ、だだだだ大丈夫」
「結祐。深呼吸、深呼吸」
「すーはー。すーはー・・・」
「それじゃあ開けるね」

憂はそう言って扉を押す手に力を入れる。

親父、お袋、結祐はこの軽音部から必ず生還して見せます！！

「「「失礼しまーす」」」
「あ、憂！」
「憂ちゃんじゃん」
「いらっしゃ～い」

中には3人の先輩がいた。
一人は憂に瓜二つだが髪の毛を肩のあたりで切りそろえているところとそのいかにも天然っぽいオーラだけは憂とは違った。
しかし髪の色といい、顔立ちといい、異常なほど似ているなぁ。
恐らくこの人が憂のお姉さんなんだろう。

もう一人はソファーで寝っ転がっていた。
特徴を述べるならば、おでこ。
カチューシャで前髪をあげているからおでこが見えるのは当たり前なのだか、なんだかそれ以上に何かを訴えかけてくるおでこだった。
あとは、なんかはきはきしていそうなオーラがにじみ出ている気がした。
それにしても、ソファーで寝っ転がってる先輩からはきはきしてそうなオーラが出るとは。

もう一人はティーカップを持っているおとなしそうな先輩だった。
ただ、特徴は山ほどあった。
まずは綺麗な金髪の髪。
天然パなのかパーマかけてるのかは不明だけど、フワフワした長い髪はどこかの王族を思わせるようだった。
次に雰囲気。
とても一つ上の先輩とは思えない寛大な雰囲気というか、とにかく大人の女性を思わせるような雰囲気だった。
そして極め付けには・・・・・・まゆげ。
俺自身極め付けにまゆげを持ってくることに違和感ＭＡＸだけど、このたくあんのような太く整ったまゆげを無視できるものはいないだろう。

幸い3人とも憂のほうを見ていたので先輩たちをちゃんと見るこ

とができたが・・・・・・・・・・親父、お袋、俺は短い人生だったが悔いは無いよ。もしもこの軽音部から生還できなくとも・・？

と冗談はほどほどにしておいて。

さて、先ほどリポートしたとおり、中にいた先輩方は全員可愛かった。

うん。それは認めよう。

でも何故にメイド服！？

「お姉ちゃん、部活見学なんだけど・・」

「うん入って入って～」

俺の心のモヤモヤを無視って奥の机へと通す平沢姉。

・・・・心の声を無視るって当たり前か。

そう自分で自分にツッコんだ瞬間。

「逃がさないわよぉ～！！！」

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

という声とともに何かが通り過ぎた。

人・・・・だよな？

「あはは。さわちゃんあのクリスマス会以来、自作の服着せるのが趣味になっちゃって」

「そ、そうなんだ～」

憂、顔が引きつってるぞ。

っつか、ココ軽音部で合ってますよね？心配になってきたよ俺。

そんな俺の気持ちとは裏腹に笑顔で席に俺たちを着かせる平沢姉。
ちなみに俺のＨＰはここまで奇跡的にノーダメージだ。

「ムギちゃん。これを運べばいいんだよね」
「そうよ。熱いから気をつけてね」

どうやらお茶をくれるらしい。
本当にここ軽音部・・？

そう思いため息を軽くつきつつ平沢姉をちらっと見ると。

カタカタカタカタカタカタ・・・・・・

ティーカップが踊っていた。
とんだ不器用さんだな平沢姉。

と、その時

「あ！」

ついに平沢姉の手からティーカップが飛び立った。

「まじかよ！！」

そう言いながら俺はなんとかカップを受け止めた。
幸いいい感じに垂直に落ちてきたので中がこぼれることもなかった。

「せ、セーフ」

「おぉ！ありがとね～」

そういいつつ軽くお辞儀をする平沢姉。

まったく、気をつけてくださいよ！そう言ってやろうと思ったその瞬間、

「お姉ちゃんお盆斜めにしちゃダメ？」

「え？」

その気の抜けた返事の直後、ガシャン？という音と共に俺の頭の上にティーカップが逆立ちした。

まあ、要は頭の上に盛大に紅茶がこぼれた。

しかもいれたてのアツアツのやつが。

「あっちぃぃぃぃぃっ？」

と言った時には既に俺は水道に向かっていた。

幸い、水道は音楽準備室内にあったので即座に消火活動を開始？？

しゅうううううう・・・・・・

俺の脳内データベースに問い合わせてみたが、どうやらショート以外で頭からけむりを出すのは始めてらしい。

この場合は頭は頭でも頭皮からだけどな。

と自分で自分に勝手に訂正をいれたその時、すっとタオルを渡された。

顔を見ていないから確証は無いけど多分平沢姉だろう。

とりあえず頭も冷やされたのでタオルを受け取り頭を適当に拭った。

・・・・・なんだろう？この気まずい感じ。
もしかして、みんな俺の顔色窺ってる・・・？
とにかく何か言わなくては！！

「え、え～と・・・。だ、大丈夫！俺、頭からけむり出すの慣れてますから！！」

しーん・・・・・。

し、しらけた！！
一体どうすりゃあいいんだ！？
一応場を和ませるための渾身のギャグだぞ！！
頼む！誰か笑ってくれ！！

「・・・・大丈夫？」
「はい。大丈夫です・・・・・グスッ」

一度もショートしたわけじゃないのに、俺の心はズタズタになった。

## 第二話　?部活見学!!??（後書き）

次回は・・・・・

『じゃあ、改めて部員紹介といくかぁー!!』

『え・・・・。そ、それはちょっと・・』

『そう言われるとなおさらやりたくなるのが人の性ですよ～』

『先輩まさか・・・男!?』

次回、【部活見学?】

乞うご期待!!・・・・・とい言って、期待してくれるとうれしいです!!

## 第三話　？部活見学！！？？（前書き）

第３話。

どうぞ！！

## 第三話　?部活見学!!??

「じゃあ、改めて部員紹介といくかぁー!!」

おでこが印象的な先輩のその一言でやっと本格的に部活見学になった。

できればもうちょっと早くそうして欲しかったけど。

頭と心がひりひりする・・・。

「それじゃあ、まずは――――――」

「はいっ!!りっちゃん隊長!」

「む、何だね?唯隊員!」

「まずは、1年生に自己紹介して欲しいです!!」

「それは確かに、それじゃあ名前を教えてくれ!!」

そう言っておでこの印象的な先輩（以下おでこ先輩）が純を指差した。

あまりのハイテンションに純は若干たじろいでいた。

俺が最初だったら絶対答える前にショートだな。

「えっと、鈴木純です」

「鈴木さんな。それじゃあ次!隣の男子!!・・・・・って男!?」

「今年から共学になったんでいても不思議ではないと思いますけど」

「なにぃ!!今年から共学だったのか!?」

「私も知りませんでした。りっちゃん隊長!!」

「わたしもです。りっちゃん隊長」

おでこ先輩に平沢姉＆ａｍｐ；金髪の先輩が乗ってきた？
自然にこれが成り立つとは・・・軽音部、恐るべきギャグ線。

一応この辺で補足しておくが、俺は未だに目線を適当なとこに逸らしているからなんとかノーダメージだ。

「ところで、共学っていう驚愕の事実も判明したところで、自己紹介続けていいですか？」
「ああ、いいけど。今のって狙ったのか？」
「狙う？何をっすか？」
「むむ、自然にダジャレが出るとは恐るべき新入生！！」
「・・・始めていいですか？」
「ああ。悪い悪い。いいよ」
「え～、邑園結祐です」
「邑園君な。それにしても、何でさっきから目を合わせないようにしてるんだ？」

ギクッ？
ば、バレてた？

くっ、このままでは危険だ。

その一心で俺は憂に助けを求めるべくアイコンタクトを図ろうとした。
のだが、そこで気がついてしまった。

アイコンタクトなんてしたら、俺ショートじゃね？

完全に退路は途絶えてしまった。

・・・・ええい？ままよ？
もうなるようになれだ？

「べ、別に逸らしてなんかないっすよ」
「ふーん。じゃあ私の目をしっかり見てみてよ」
「え・・・・。そ、それはちょっと・・・・」

なるようにできねぇぇぇ？
やっぱショートは辛ぇよ？

と、俺の心が涙でいっぱいになりかけたその時だった。

「あ、あの？」

憂ぃぃぃっ？
ナイスタイミング？
やっぱ持つべきものは最高の友達だね。

「結祐くんは目が合ったり触れられたりすると、なんて言うかおもしろいことになっちゃうからあんまりやめた方が・・・・」
「「「おもしろいこと？」」」

憂、俺が送った褒め言葉を返せっ？

余計食いついちゃったじゃんか？

「ふ～ん。おもしろいことか～」
「ちょ、のぞきこまないで！ホントにやばいですから！！」
「そう言われるとなおさらやりたくなるのが人の性ですよ～」

そう言って俺を覗き込んだおでこ先輩。
必然的に目があってしまう。
嫌だ！ショートは、冥界旅行は嫌だァァァァ！！
と、思ったのだが、
「アレ？目があってんのに・・・？」
「なんだ大丈夫じゃん。憂ちゃんも大げさだなぁ」
俺はショートしなかった。
何で？どうして？Ｗｈｙ！？
全く意味不明だった。
何でショートしねぇんだ！？
考えられるとすれば・・・・・
「先輩まさか・・・男！？」
「んなわけあるかぁッ！！」
「ですよね～。じゃあどうして・・・・」
「結祐くん、もしかして治ったんじゃない？」
「治ったのかな・・？」
そう俺が首をかしげると、おでこ先輩が急に俺の顔をガッチリつかんだ。
一瞬この場にいる１年生が全員ヤバいと思ったがまたもや平気だった。
何でだ？

謎が深まってしまったので再び首をかしげようとしたのだが、そのとき急におでこ先輩の手に力が入った。

「状況が読めないけど、そんなに目が合うとヤバいことが起こるはずなのであれば唯を見ていればいいだろー！！」

「・・・・は？」

いやいや、読めないのはあなたの脳内ですよ。

と、ツッコミを入れている間におでこ先輩により無抵抗な俺は無理やり平沢姉の方に顔を向けられてしまった。

そして、不覚にも目があってしまった。

「なんだ、やっぱり平気じゃないか」

そうおでこ先輩が言いきった瞬間。

ボンッッ！！！

俺の精神は冥界旅行へ出かけてしまった。

？？？？？

「おーい。大丈夫かー？」

「うおわっ！！」

目が覚めると目の前におでこ先輩がいた。

でも、またまたショートしなかった。

どうやらこの先輩のみ大丈夫らしい。

「いや～、いきなり頭からけむりだして机に突っ伏しちゃうもんだからビックリしたっつーの」

「す、すいません。体質っつーか、どうにも出来ないモンなんで」

「らしいなー。憂ちゃんから聞いたよ」

「そう言えば、憂と純は？」

「もうとっくに帰ったよ。惜しくも二人とも確保できなかったけどなー」

「そうすか」

そう言いながら俺は窓の外を見てみた。

確かに西日が差しこんでるし、きれいな夕焼け見えちゃってんな。

ったく、どんだけ気失ってたんだ・・・・・なっさけねー。

「んじゃあ、俺もそろそろ・・・・」

「「「「ちょっと待ったーーーーーー！！！」」」」

「えぇ！？憂たち帰っちゃったし、俺見ての通りショートしちゃうから部活に入るのなんて無理っすよ！！」

「そんなのは百も承知だぜ！！だから私しか喋って無いんだろ？」

「た、確かに・・・」

「こっちはこっちなりにショートさせないようにしてるんだから、自己紹介と演奏聞くぐらいいいだろ？」

・・・・・あんまりここにとどまる理由として成立していないような。

でも長く居座っちゃったし、それぐらいは聞いて行くのが礼儀か。

よしっ！今度は絶対ショートしねぇぞ！！

「わかりました。俺も流石にこのまま立ち去るのは気が引けるんで」
「よぉーし！！それじゃあ、自己紹介いっとくかぁーーー！！」
「「おーっ！」」
「まずは、我らが軽音部の源！お茶とお菓子の提供者であり、キーボード担当のお嬢様！！琴吹紬！！」
「どうも、琴吹紬です♪」

ぐっ！！
耐えろ、耐えるんだ俺。
大丈夫。俺が見ているのは目じゃない、あの整ったまゆげだ！！

「続いてー！！軽音部の華。ファンクラブまで存在する華麗なるベーシスト！！秋山澪！！」
「ファンクラブの事は言うなーーーー！！っと、秋山澪です。よろしくな」
「よろしくです」

・・・・秋山先輩。
目を逸らしてくれてありがとーーーーっ！！

にしても綺麗な先輩だな。
長い黒髪も、しっかり者そうな顔立ちも、全部のパーツが共鳴し合っているような感じがする。

ファンクラブがあるのも納得だな。

「さて次は、我らが軽音部のギター担当にしてメインヴォーカル！そして憂ちゃんの姉でもある、平沢唯！！」
「どうも、平沢唯です。憂から話しは聞いてるよ～。憂と仲良くし

てくれてありがとね」
「い、いえいえこちらこそ・・・・・」

容赦ねぇぇぇ！！
悪気は無いんだろうが、そこまで真っ直ぐ見られると悪意しか感じねーよ！！

うぅ・・・。
意識が飛びそう・・・。

「ほら、唯それくらいにしとけ。それ以上やったら邑園君また気絶しちゃうだろ」
「はっ！！忘れてた！！結祐くんごめんね。そしてありがとね澪ちゃん」
「それじゃあ、意識が朦朧としてきたところで私の自己紹介いくぜ！！」
「ど、どう・・・ぞ」
「私は、頭脳端麗・容姿明晰！軽音部の創設者でもあるーーーーー田井中り～つ～！！」
「あの・・・・」
「ん？何だね邑園君」
「『頭脳端麗・容姿明晰』って頭脳明晰・容姿端麗の間違いでは？」
「こ、細かい事は気にするな！！それじゃあ、自己紹介も終わったところで演奏いってみるかーーー！！」

田井中先輩のその一声で全員が持ち場につく。

・・・・案外カッコいいな。

「それじゃ、いくぞ！1，2，3，4！！」

?.?.?.?.?

演奏はそこまで凄いわけでは無かった。
音楽知識がほぼ0の俺が聞いてもお世辞にもうまいと言えるもので無かった。

なのに俺は物凄く感動していた。
みるみる音楽に引き込まれていった。
聞いてる間は目があったりしたけど、ショートすることすら忘れてた。

演奏が終わったその瞬間。
俺は惜しみない拍手を送っていた。
その行為は意識的にやったというよりか、反射に近かった気がした。

「拍手してくれてるってことは、それなりに良かったってことか？」
「いいえ！あんまりうまくありませんでした！！」
「「「「え？」」」」

場が凍りついたのがわかった。
でも夢中になっていて、気の利いた言葉が浮かんでこなかった。

だから、俺は今自分が感じたことと、自分の思いを素直に伝えることにした。

「でも・・・・・」
「でも？」
「引き込まれました。何度も何度も平沢先輩や秋山先輩とも目があ

ったけど、ショートすることを忘れていました。それくらい引き込まれました！！」

その言葉を聞いて一気に先輩方の表情が明るくなった。

が、俺の話はまだ終わっていない。

この次の言葉が一番いいずらいけど言いたかった。

「それで、さっきまで入部しないって言い張ってたのに急に心変わりしたみたいで不愉快になっちゃうかもしれないんすけど・・・。俺を、この部に入部させてください！！」

若干、沈黙が続いた。

そのあいだ俺の心拍数はどんどん上がった。

もしかしたら駄目かな？とも思った。

けど、帰ってきた言葉はいたってシンプルだった。

「「「「軽音部へようこそ！！！」」」」

**第三話　?部活見学！！??（後書き）**

次回は・・・・・

『くっ！やっぱり判断ミスだったのか！?』

『お、俺一人・・・！?』

次回、【新歓ライブ！！】

・・・・・多分一話で収まるはずっ！！

**第四話　？新歓ライブ！！ー前編ー？（前書き）**

一話で収まりませんでした（；Д；）

近いうちに後編も投稿できる様に頑張ります！！

感想をくれるとうれしいです！！

それでは４話どうぞ（＾Ｏ＾）／

## 第四話　？新歓ライブ！！ー前編ー？

入学してから８日。
俺、邑園結祐が軽音部に入部した次の日。
未だ多くの新入生が部活を決めている最中の今日は、実は軽音部の命運を懸けた日だったりする。

そう、今日は・・・・

「新歓ライブだぁーーー！！」
「「おぉーー！！」」
「ユウ、澪、声が出てないぞ！ほらっ、二人合わせてせーの！」
「「お、おぉ・・・・！」」
「よし！それじゃあまずは――――――」
「お茶にしましょうか♪」
「「さんせーいっ！！」」

そう言って田井中先輩やひらさ・・・ま、秋山先輩以外はお茶用（？）テーブルに座ってしまった。

新歓ライブ――――――要は新入生歓迎ライブとは俺を含む今年入学した新入生を歓迎するための名前のまんまのライブだ。
そして、新入生の心を軽音部がキャッチするための最初のステージだと俺は思う。

なのに・・・・

「何やってんだ～？ユウ。こっちに来いよ」
「おい律！」

「そうだよゆーくん。クッキーおいしいよ～」
「唯まで！」
「まぁまぁ澪ちゃん。とりあえず紅茶でも飲んだら？」
「あぁ、ありがとうムギ・・・・・・ずずっ」
「「あ、澪（ちゃん）飲んだ」」
「・・・・・ま、まぁ本番前に心を落ち着かせるのも必要だよなっ！！」

唯一の仲間だと思ってた秋山先輩が手なずけられたッ！！

お茶やお菓子は確かに必要なのかもだけど、本番前はさすがに自粛してくださいよ・・・。

「ほら、何やってんだ？早く来いよ、ユウ」
「そうだよゆーくん。私がゆーくんのぶんのクッキーまで食べちゃうよ～？」
「くっ！この部に勢いで入部したのは判断ミスだったか！？まあいいや。それより先輩たち練習しとかなくていいんすか？」
「わかってないな～ゆーくんは」
「そうだぞユウ。私たちはお茶しないと演奏できないんだぞ？」
「威張って言わないでください。っつか、入部した途端に妙なアダ名で呼ばないでくださいよ」
「えぇ～。べつにいいじゃん。ゆーくんで」
「そうだ！結祐よりユウの方が呼びやすいじゃないか？」
「いや、そういう問題じゃ・・・」

俺がそう言いながら呆れた様にため息をついたそのとき。

コンコンッ。

音楽準備室の扉が誰かによって叩かれた。
誰かはわからないが、お茶中の先輩方は全く動きそうにないのでとりあえず俺は扉を開けてやった。
「はいはーい？どなたですかい？」
「あ、生徒会の真鍋和（まなべのどか）ですけど、部長・・・と言うか律いるかしら？」
「田井中先輩お呼びでっせ～」
「ほいほいー」
そういいながら田井中先輩は真鍋先輩と廊下に出て行った。
それにしても驚いた。
扉を開けたら女子とか・・・・ゾッとしたわ。
最近ものすごく目を逸らすスピードが上がってる気がする。
・・・それっていいことなのか？
と思いつつ、振り返ると目に入ったのはクッキーを食べる先輩たちだった。
はぁ～。
こんなんで新歓ライブ平気なのかよ？
そう呆れながら伸びをして、ため息をつきながら下を向いた。
すると、琴吹先輩がいつの間にか俺を見上げていた。
・・・・見上げる？
俺は見下ろす。

つまり、目が合っちゃってる？
そう自覚した瞬間、
「～～～～～ッ？」ボンッ？
と、俺は頭が爆発したようにけむりを上げその場に倒れた。
琴吹先輩はそういうことしないと思ったのに・・・・。
と、俺が何かを考えることで意識をなんとか保ち復帰しようとしていたその時、俺は人の好奇心の怖さを知ることになった。

一方そのころ、私、田井中律は和から今日の新歓ライブの説明を受けていた。

「と、言う訳だから、みんなにも伝えてね」
「へーい」
「伝えることちゃんと覚えてるわよね？」
「大丈夫！！なぜなら私が田井中律だからッ！！！」
「ちょっと心配ね・・・・。まぁでも、さすがに律でも大丈夫よね」
「”さすがに”ってどういう意味だよ・・・・。ま、田井中さんに任せとけって！！」
「それじゃあ、よろしくね」

そう言って持ち場に戻ろうと踵を返した和を私は見送った。

さて・・・・なにを伝えるんだっけ？
忘れちゃったＺＥ☆

って言うのは冗談で、マジでなんだっけな～？
と、ついさっきかわした会話を思い出しながら私は部室のドアを開けた。
すると、目に入ったのは、

白目をむいて倒れているユウと、それを笑顔でつつくムギと唯だった。

「あ、りっちゃん！ゆーくんすごいんだよ！！」
「そうなの！結祐くんどんなにつついてもビクともしないの！！まるで石像みたい！！」
「や、や・・・・・・め・・・・・・。意識が・・・・・・と・・・・・・ぶ・・・・・・」

・・・・・・地獄絵図？
ってか、ユウ『やめて』って言おうとしてんじゃん。
なのに、ムギも唯も・・・・・・

一体私がいない間に何があったんだよ！？

「お、おい澪」
「どうした？律」
「澪はこれを見て何とも思わないのか？」
「んー・・・・・・」

澪はそう唸ったあと、テーブルに乗っているクッキーを1つ頬張りながらいたって冷静に私に言った。

「多分、これが軽音部の日常に加わると思うからいちいち驚いてた

らキリがないかなーって」
「・・・・・ついに澪まで」
♪♪♪♪♪
「ったく、マジでやめてくださいね。目ぇ合わすのも触れ合ったりするのも俺ダメなんすから」
「ごめんね。ついやりたくなっちゃって♪」
「はぁ・・頼みますよホントに。ところで、田井中先輩。さっきなに話してたんですか？」
「聞きたいか～？」
「もったいぶらないでくださいよ。どうせ新歓ライブ関係でしょ？」
「そうだぞ律。私たちなんだかんだで本番前なのにまだ練習してないだろ」
「しょうがないな～。教えてやろう！楽器や機材の搬入だが・・・・私が講堂許可証とか出し忘れたせいで生徒会は手伝えないそうだ！！」
「そんな！？りっちゃんそれじゃあ・・・・」
「あぁ。アンプもドラムも自分たちで運ばなくちゃいけないな。・・・・くっ！一体誰のせいで！？」
「お前のせいだろ律」
「・・・・てへっ☆」
「てへっ☆じゃない！！どうするんだよ？本番まで時間無いぞ。まだ通しの練習もしてないのに・・・・」
「そうね、衣装にも着替えてないしね」
「「「「さわちゃんっ！？」」」」
そう先輩が声をあげて見た先には、誰もいなかったはずなのにい

つのまにか女性が座っていた。

”さわちゃん”と呼ばれていたが、確か音楽教師の山中さわ子先生・・・・だった気がする。

生徒の間でも若くてきれいな先生で通っているらしい。

勇利曰く『あのスタイル！あの笑顔！長い髪！そして眼鏡！！全部が大人の女性って感じを引き立ててる！！』そうだ。

実はそのあと『いや～。生徒と先生の禁断の愛なんてのも・・・・』と、アホみたい（実際アホだが）な事を言っていたので成敗したが・・・、まぁそんな回想は今必要ないだろ。

と、自らの脳裏から忌々しい勇利（アホ）の記憶をもみ消していると、

「あ、あなたが新入部員ね」

と声を掛けられた。

突然だったのでちょっと驚いたが、ショートはしなかった。

女子に囲まれてるって言う最悪の環境のおかげだろうか・・・？

そう考えると思わず苦笑いがこぼれてしまいそうだったので、そのまえに返答をすることにした。

「えっと、邑園結祐です。たしか、山中先生でしたよね？音楽科の」

「あら？自己紹介はいらないみたいね」

「まぁ、一応先生方の顔と名前は覚えてますから。んで、その山中先生が軽音部に何の用すか？」

「ふっふっふ・・・・見て驚けっ！！」

そう言って山中先生が机の上に出したスーツケースの中には、チャイナドレスが入っていた。

チャ、チャイナドレスだとッッ！！とまではいかないが、少し驚いた。

でも、これを見せてどうするんだ？

そう俺が思った瞬間。

「「「カッコいーーーー！！！」」」

田井中&平沢&琴吹先輩が身を乗り出して叫んだ。

・・・俺的には服よりこっちのリアクションの方が驚いたわ。

「さわちゃんこれも作ったんだよな？」

「そうよ～。大変だったんだから」

「ふーん。作ったんすか・・・・・って作ったぁ！？これを！？」

「モチロン！！私はどんな服だって作れるわよ！」

「そうだよ～。ゆーくんが部活見学しに来た時私たちが着てたメイド服もさわちゃん先生の手作りだよ！」

「へ、へぇ・・・・」

恐るべき、山中さわ子！！

メイド服とか、チャイナドレスとか、並の人間じゃ作れねーぞ・・・。

「ところで先生。コイツをどうするんすか？」

「なに言ってるの？着るのよ。唯ちゃんたちが」

「・・・・は？」

これを先輩方が着る・・・？

ちょこっとチャイナドレスの先輩を想像してみた。

まぁ、もともと美人だし似合わなくは無いな。

ただ、ちょっと着せるのは無理じゃないかと俺は思った。

何故なら、秋山先輩が山中先生登場から青ざめて動かないからだ。

なんで青ざめているかは分からないが、先生登場と同時だったのでこのチャイナドレスが関係していることは間違いないだろう。

例えば――――――着るのが恥ずかしいとか。

俺がそう思ったときだった、

「れ、練習しよう！！」

急に秋山先輩が立ち直った。

「ほ、本番まで時間無いし、急いで練習しよう！なっ！！」

「そんなこと言って～。着たくないだけなんじゃないか？澪」

「そ、そんな事はない・・・・ような・・・・・」

「やっぱそうじゃんか～。まぁ、そこまで言うなら澪は着なきゃいいんじゃないか？」

「え・・・？」

「そうだよ澪ちゃん。無理に着なくてもいいんだよ？」

「そうね。澪ちゃんは恥ずかしがり屋さんだしね♪」

「私も、せっかく作ったものを着てもらえないのは残念だけど、澪

ちゃんのためなら涙をのむわ」

そんなみんなの励ましで秋山先輩は徐々に表情を明るくしていき、

「み、みんな・・・・・」

そう呟いたときには感動で涙目になりかけていた。

のだが、

「ま、でも一人だけ制服ってほうが帰って目立つかもな～♪」

「そんなの嫌だぁぁぁぁ～！！」

どん底に突き落とされた。

うんうん。

これが噂の『持ち上げといて突き落とす。持ち上げられた時ほど痛みは強い。』の”ちやほやの法則”か。

そう目の前で起こったことを考察していると、ふと山中先生の腕時計が目に入った。

現在の時刻は１２：２５。

新歓ライブは『新入生オリエンテーション』要は部活紹介の中に組み込まれているから、集合時間は１３：００。

今から通しの練習に・・・・確か３曲とか言ってたから多く見積もって大体２０分くらい。

先輩たちの着替えと身だしなみに多く見積もって１０分。

楽器類、必要な機材を運ぶのに短く見積もって１０分。

合計４０分・・・・。

時間が足りねぇぇッッ！！

その驚愕の事実に気がついた俺は先輩たちを見たが、相変わらずぎゃあぎゃあ騒いでいた。

・・・本来は右も左も分からない新入部員が偉そうなこと言うべきじゃないんだろうが、事態が事態だ。

迷ってられるか！！

「先輩！！」

「「「「ん？」」」」

「ん？じゃないっす！！あと本番まで３５分しか無いんすよ！！」

「大丈夫だよゆーくん。まだ３５分もあるから」

「じゃあ聞きますけど、琴吹先輩、最後の通しの練習するのに何分かかります？」

「２０分くらいじゃないかしら？」

「じゃあ先生。先輩たちの着替えに何分かかりますか？」

「チャイナドレスだからちょっと私も手を加えたいし・・・・１０分くらいじゃないかしら？」

「次、田井中先輩。楽器運ぶのに何分かかりますか？」

「私たちだけで運ぶからな・・・・頑張っても１０分はかかるんじゃないか？」

「それじゃあ、平沢先輩。練習、着替え、運搬、合わせて何分かかりますか？」

「え～と・・・・４０分かな？」

「それじゃあ、秋山先輩。本番まで何分でしたっけ！？」

「３５分・・・・って」

「「「「「間に合わないじゃん！！」」」」」

ここまで来てやっと気付いたんかい・・・・・。
っつか、俺の予想ドンピシャだったな。

ま、とにかく先輩たちはやっと気がついたみたいだし、練習時間でも縮めれば・・・・

「りっちゃんどうしよ！？私一回本番前に通さないと分かんないよお～・・・」
「確かにそうだな。私もちょっと心配だな・・・・」
「なんだかんだで、今週は新入部員勧誘のことしか考えて無かったもんね・・・・」
「じゃあ、やっぱり練習は縮められないよな・・・・」

なっにいいいいいい！？
アンタ達、普段何やってんだ！？

くっ！こうなりゃあ・・・・

「じゃ、じゃあ、制服で出場して着替えの時間を無くせ――――――――」
「それだけは許さないわよぉ～・・・・・・」
「うわ！さわちゃん”失恋モード”だ！！」
「し、失恋モード？」
「そうだよゆーくん。失恋モードのさわちゃんはだれにも止められないんだよ」
「着替えの時間を・・・私の努力をどうするってぇ～・・・・」

そう言ってまるで『バ○オ・ハ○ード』のゾンビのような動きで俺に近づいてくる山中先生。
非常に動きは気持ち悪いが、女性は女性。

あんま近づかれると・・・・マズイ！！

「わ、分かりましたよ！！でもどうするんすか！？たしか軽音部はトップバッターっすよ！遅れたら全体進行に支障が出ちゃいますって！！」

「確かに結祐がいうことも正しいな」

「でも澪、練習も着替えもどうにも出来ないんだぞ？」

田井中先輩のその言葉でこの場にいる全員が黙り込んだ。

ぶっちゃけ最悪の状況だ。

この間にも刻一刻と時間は迫ってるし、一体どうすりゃあ・・・・・・

そう思った時だった。

「そうだ！！」

「なんか浮かんだのか唯！？」

「うん！！」

「なになに？教えて唯ちゃん！？」

「えっとね、一つ一つやって間に合わないなら同時にやればいいんだよ！」

「同時に・・・・？」

「そう！私たちが練習している間にアンプを、着替えている間に楽器を運んじゃえばいいんだよ！！」

「でも平沢先輩。生徒会は手伝ってくれないんすよ？」

「そうだぞ唯。たしかにそれなら可能だけど、誰がやるんだ？」

「そうね・・・。たしかに私たちは動けないから、自由に動けるのはさわちゃんぐらいよね・・・・」

「私！？無理よ無理無理！！そもそも着替えの時は私がいない――

――――」

「違うよみんな。私たち軽音部にはもう一人部員がいるじゃん！！」

「「「「あ・・・・・」」」」

その平沢先輩の言葉で、傍観者だったはずの俺は急に話しの中心に放り出された。

ってか、この流れはまさか・・・・・

「お、俺一人で・・・・！？」

いやいやいや、絶対無理でしょ！！

一人でドラムもアンプも全部運べるわけ無いじゃん！！

そんな悲痛な思いを込め、俺は唯一目を合わせられる田井中先輩の目を見つめた。

すると田井中先輩はとたんに優しく微笑んで俺に言い放った。

「ユウ・・・・・頼んだぞ！！」

こうして俺の高校生活初の肉体的死闘が幕を開けた。

ライブまで残り３０分！！

**第四話　？新歓ライブ！！ー前編ー？（後書き）**

次回は・・・・・

『あなたも大変ね・・・・・』

『目のやり場がねぇぇぇ！！』

『よっしゃー！！いくかー！！』

『あの、入部希望・・・・なんですけど・・・・』

次回【新歓ライブー後編ー】

## 第五話　？新歓ライブ！！ー後編ー？（前書き）

新歓ライブ後編です。

曲名や歌詞は、著作権保護法に触れるため虫食いや一部のみとなっています。

ご了承ください。

それでは、どうぞ。

## 第五話　？新歓ライブ！！ー後編ー？

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・」

現在、俺、邑園結祐は自分との死闘を繰り広げていた。
しかも、二種類の。

一つは肉体的死闘。
要はアンプ運びなわけだが、山中先生から台車を貸してもらっても重たいものは重たい。
しかも階段は台車ごと担がなくてはならないのだ。

アンプだけであともう一往復しなきゃなんねぇのかよ・・・・。

次にもう一つの死闘。
それは――――――――

「目のやり場がねぇぇぇぇっっ！！」

精神的死闘。

っつても、普通ならこの状況でそんな戦いは起こらない。
はずだけど・・・・・なにしろ俺は女子と目があっただけでショートするようなかわいそうなスキル（？）を持っているため、この女子で溢れかえった廊下を通るのは相当きついのだ。

しかも、俺は今台車でアンプを運搬中。
どの方向からも好機の目が絶えねぇぇぇぇっ！！

「くっ！！耐えるんだ邑園結祐！！お前はできる男だッッ！！」

そう叫びながら俺はひたすら講堂へと走った。

♪♪♪♪♪

こんにちわ。

平沢憂です。

今日は私が見る初めてのお姉ちゃんのライブです！！

「純ちゃん。一緒にライブ見に行かない？」

「ごめんね。憂。私ジャズ研に入部したから、そっちの手伝いがあって・・・」

「あ、そうなんだ・・」

「ごめんね憂」

「ううん。気にしないで！」

「ホントにごめんね。それじゃあ、私行くね」

そう言って純ちゃんが教室を出ようとした時でした。

『耐えろ俺ぇぇぇーーーーーッッ！！』

と叫びながら凄い速度で何かが通り過ぎました。

よく姿は見えなかったけどあれは・・・

「ねぇ、憂」

「なぁに？純ちゃん」

「今のって結祐だよね？」

「うん。そうだと思うよ。たしか結祐くん、軽音部に入部したってお姉ちゃんが言ってたから」
「へぇ・・・・あの結祐がね・・・・・・。まぁ、いっか。それじゃあ、今度こそ私行くね！」
「うん！ジャズ研頑張ってね！」

そう言いながら手を振って私は純ちゃんを見送りました。

さてと、じゃあ一人で見に行こうかな・・・・と席を立った時でした。
たまたま、鞄を持ち上げてどこかへ行こうとする女の子が見えました。

確か、中野梓ちゃんだったかな・・・・？

せっかくなので私は誘ってみることにしました。

「あのっ！！」

♪♪♪♪♪

「あなたも大変ね・・・・」

それが汗水たらしてアンプを運んできた俺を見た真鍋先輩の率直な感想だった。

「軽音部に入部して大変じゃない？唯から聞いたわよ。すぐに気絶しちゃう面白い後輩が入部したって」
「まぁ、気絶しちゃうのに関しては何部だろうがこの学校に入った時点でアウトだし、それに、俺が決めた道だから。途中であきらめ

んのはカッコ悪すぎですしね」
「偉いのね」
「真鍋先輩には敵いませんよ。っつか、平沢先輩から聞いたってことは俺がどんな条件でショートするかもご存知で？」
「えぇ。目を合わせたりすると駄目なんでしょう？だから今も下向いてるのよね？」
「ご理解とご協力感謝します！！それじゃあ、俺続きがあるんで」
「えぇ。頑張ってね」

そう言ってくれた真鍋先輩に軽く手を振って俺は部室へ向かった。

♪♪♪♪♪

そして現在１２：５８。
結局俺はあの後、二台目のアンプ、ドラム、キーボード＆ギター＆ベースを運ぶために三往復もした。

一応俺は中学時代、陸上部だったのでまぁ体力はあると思ってたのだが・・・・

「やっぱり半年以上空くと体力もなくなるわな・・・・・」
「お疲れ様。後は唯たちを待つだけね」
「そ、そうっすね・・・・・・」
「大分疲れてるみたいね。とりあえず、水でも飲んだら？」

そう言って真鍋先輩は俺にペットボトルを差し出した。

真鍋先輩、メッチャいい人だ！！

「ありがとうございます！！あ、でもこれまさか・・・・・」

「あぁ、大丈夫よ」

真鍋先輩がそう言うので俺は有難く水を一口いただいた。

その瞬間、

「まだ私しか口付けて無いから」

・・・・・ボンッ！！

だから、それを懸念してたのに・・・・・。

大丈夫って言ったじゃん！この裏切り者ーーーー！！

そう言いたかったが、意識が朦朧としてうまくしゃべれない。

ただ、真鍋先輩は俺がショートしたことに気がつかず、喋り続けていた。

「邑園君が気にしてたのって関節キスのことでしょ？私そういうの気にしないから大丈夫よ。だから、遠慮せずに飲んでね」

そう言って真鍋先輩はやっと俺の方を見た。

白い蒸気を存分に上げて気を失いかけている俺を。

「・・・・・あれ？」

おそらくとても見慣れた光景とは言えないからだろう。

いつも落ち着いている真鍋先輩がそう腑抜た声を出した時、ちょうど軽音部が到着した。

そして困惑している真鍋先輩に向かって秋山先輩が一言。

「和・・・・・今度から気をつけような」

♪♪♪♪♪

そしてついに迎えた１３：００。

俺もなんとか1分で意識を回復させ、やっと軽音部は全員集合した。

チャイナドレスで。

「よぉーし！！全員準備は良いな！？」

「だ、大丈夫！」

「大丈夫よ♪」

「私もギー太も絶好調！！」

「ユウはどうなんだ？」

「まぁ、絶不調ではないっす」

「それでよし！！」

そう言って田井中先輩は俺にニッと笑うと、ドラムスティックを頭の上にあげ叫んだ。

「よっしゃー！！行くかぁーー！！」

♪♪♪♪♪

１３：００。

お姉ちゃんのライブを見るために私は講堂に来ていました。

さっき誘った中野梓ちゃんと一緒に。

「ごめんね。付き合わせちゃって」

「ううん。大丈夫」

そう言った梓ちゃんは何だかつまんなそうでした。

何か、誘わないほうがよかったかな？

そう私が思った時。

ステージの幕が上がり始めました。

♪♪♪♪♪

俺は先輩たちの演奏を舞台袖で聞いていた。

最初の曲は『ふ〇ふ〇時間』。

名前も歌詞もメルヘンチックな曲で、俺が始めて聞いた曲でもある。

♪～♪～♪

と、平沢先輩の声が会場中に鳴り響く。

やっぱりあんまりうまくないな。

俺は苦笑いしていた。

でも、

『～～～～どうにーかーなーるよねっ！！』

やっぱり引き込まれるな。
そんなことを再確認している間に、一曲目が終わってしまった。
確か、一曲目の間に部活紹介入れるって言ってたな。
そう考えている間に、平沢先輩のＭＣが始まる。
・・・・あの先輩、若干抜けてるけど大丈夫か？
『え～。新入生のみなさ「キィーーーーンッ」あわわ・・・』
大丈夫じゃ無かった！！
頼みますよ、平沢先輩！！
これで部員獲得できないと、１年生俺一人になっちゃうからっ！！
『えっと、改めまして。新入生のみなさん。ご入学おめでとうございます！そして、今日は私たちの曲を聞いてくれてありがとうございます』
そこまで言ったところで俺はちょっと心配になって、舞台袖から出て観客を見てみた。
怪訝な目で見てる人はいないっぽいから、まぁ大丈夫か。
っつか、むしろチャイナドレス効果で好機の目で見てる人が多いな。
『私たち軽音部は現在５人で活動しています。せっかくなので部員も紹介しておこうと思います』

案外平沢先輩はＭＣうまいんだな。
聞いてて安心する。

そう感心しながら、俺は再び舞台袖に戻る。

『まずは、ベースの秋山澪ちゃんです。澪ちゃん一言どうぞ』
『え、えっと。秋山・・・・澪・・・・です』

”かわいーーっ！！”という歓声がまばらに起こった。
だてにファンクラブがあるわけじゃなってことか。

『次に、キーボードの琴吹紬ちゃんです』
♪♪♪♪～『琴吹紬です♪今やったようにキーボードをやってます♪』
『ありがとムギちゃん。それじゃあ次は、我らが軽音部の部長にしてドラムの――――――』
『田井中律だ！！』ダダダンッ！！

田井中先輩が叩いたドラムに合わせて、”カッコいー”という歓声が巻き起こった。

田井中先輩ナイスッ！！
さて、それじゃあ後は平沢先輩が紹介して二曲目、三曲目突入か。
なんとか行けそうだな。

俺が安堵の息をついた時だった。

『ありがとね～りっちゃん。えっと次は、みんなと同じ1年生です』

という、謎のＭＣが始まったのは。

明らかにおかしいよね？
俺演奏すらしてないのに、っつか入部したの昨日なのに、なによりこれって1年生のためのライブなのに、何故ここで俺を出す！？
そんな俺の気も知らず平沢先輩はＭＣを続ける。
『今はまだ何の楽器もやって無いけど、今日ここに楽器を運んでくれたのはその一年生です』
待て待て待て！！
この流れは舞台に出なきゃいけないパターンじゃねぇか！
無理だからね！俺がこのタイミングで出るのもおかしいし、まず第一俺は舞台なんかに出たら突き刺さるような視線に負けてショートだっつーの！！
そう嘆きながら頭を抱えた瞬間。
隣の真鍋先輩が、俺に向かってこう言った。
「観念したほうがいいわね」
「仰るとおりです・・・・・うぅ・・・・・」
『それでは出てきてもらいましょう！邑園結祐くんです！！』
・・・覚悟は決まった。
俺、いざ出陣！！
と、意気込んで俺は舞台に上がった。
『それじゃあ、ゆーくん一言どうぞ』

「・・・・・・」
『あれ？ゆーくん？』
「・・・・・」
『・・・まさか！唯とりあえず続けろ！ユウはもう駄目だ！！』
『え？わ、分かった！え～と、ゆーくんはあの・・・その・・・・・』

ざわつく新入生を必死に平沢先輩がなだめるのと同時に、俺の残された意識は消え去った。

♪♪♪♪♪

「ほんっとにすいません！！」
「いや、そんなに謝んなよ・・・」
「でも、俺がショートしたせいでライブを台無しにしちまって・・・・」
「いや、あれは私たちの不注意もあるから、結祐が気にすること無いよ」
「いや・・・・ほんとにすいません」

もう謝るしかなかった。

何故なら、俺がショートしたせいで雰囲気は台無し。
加えて、時間が押してしまって二曲しか演奏できなかったんだから。

謝っても、謝りきれねぇよ・・・・。
これで新入部員来なかったらどうしよ・・・・。

「とりあえずお茶にしましょうか♪」

「そうだな！クヨクヨしててもしょうがないしな！！」

そう先輩たちは俺を元気づけようとしてくれているが、入部二日目でこの失態。

簡単には立ち直れねぇよ・・・。

とはいえ、折角の好意を無視るわけにもいかないのでとりあえず席に着く。

「・・・やっぱ入部希望者来ないっすね。はぁ・・・・」

「まぁ、新歓ライブがあんなことになっちゃったしな」

「律！！」

「う、嘘だよ・・・」

「いやいや、田井中先輩の言う通――――――」

コンコンッ。

それはドアをたたいた小さな音だったが、一瞬で俺たちの口を黙らせた。

入部希望者かも。

そんな期待が俺たちの中で渦巻く。

が、いつまでもドキドキしてほっとくわけにもいかないので、田井中先輩がドアに向かって言った。

「どうぞー」

すると、ドアがゆっくりと開いて、

「あの、入部希望なんですけど・・・・」

「い、今なんと？」
「入部希望です」

その言葉を聞き先輩たちの表情が一気に明るくなる。
もちろん俺も、気絶後特有の酔った時のようなグラグラする視界でドアを見て、表情を明るくした。

う～ん、でもあのシルエットどっかでみたような？

そう俺がぐらつく視界で出入り口を見続けていると、田井中先輩がたちあがった。

そして、

「確保ーーーーっ！！」
「きゃあああああ！！」

と、叫びをあげる入部希望者に無理やり抱きついた。

おいおい、んなことしたら逃げちゃうんじゃ・・・・・

そう俺が懸念を抱いたその瞬間。
俺のぐらつく視界がきっちり新入部員の顔を捉えた。

特にこれといって琴吹先輩のような特徴は無かったが、長い紺のツインテールが特徴的な女子・・・・・・・ってあいつは！！

「梓ぁ！？」

その俺の叫びに反応して新入部員が俺の方を向く。

目がばっちり合ったけど、ショートしない。
やっぱり梓だ。

と、確信は一応得たが念のため確認しておこう。

「お前、中野梓だよな？お前、なんでこの学校にいるんだよ？」
「それはこっちの台詞！！結祐こそなんでこの学校にいるの！？ここ元女子高だよ！？」
「そ、それは色々あったんだけど、とにかく良かった！！入部してくれたことも、梓がこの学校にいてくれたことも！！」
「・・・・えっと、お二人さん。盛り上がってるとこ悪いんだけど。知り合いなの？」

田井中先輩のその質問に対して、俺と梓は目を見合わせた。

別に隠すことじゃねぇよな？

そうお互いに確認すると、ありのままを言った。

「「俺（私）たち、幼馴染です」」

**第五話　？新歓ライブ！！ー後編ー？（後書き）**

次回は・・・・

『放課後が楽しみでした！！』

『”ツンデレ妹属性の中野梓ちゃんだろ！？』

次回、【新入部員？】

## 第六話　?:新入部員?:?:?:（前書き）

第六話です。

相変わらず、いや、いつも以上の駄文ですいませんm（＿＿）m

それでは、どうぞ。

## 第六話　？新入部員？？？

これはいつもの登校中。
俺はこの春、隣の市から引っ越してきてご近所さんになった悪友、篠原勇利と歩いていた。

「なぁ勇利」
「ん？どうしたんだよ結祐？俺の顔をじっと見つめちゃって～」
「・・・・・」
「な、何なんだよ！？僕の顔なんかついてる？」
「・・・いや別に」
「じゃあなにさ？はっ！！もしかしてカッコよすぎるｍｅの顔に惚れた！？」
「んなわけあるかアホたれ」
「じゃあなんなんだよ～？そんなに顔を見つめられるとウチ照れちゃうんだけどｗｗ」

そう言って勇利は顔を両手で覆って左右に振った。

ぶっちゃけ気持ち悪い。
っと、俺が言いたかったのはそんな事じゃ無かった。

「あのさぁ、アホみてぇに舞い上がってる所悪いだけどさ」
「ん？何？」
「お前のその一人称を変える癖、治んねぇの？」
「・・・あれ？また変わってた？」
「あぁ。ばっちり変わってたぞ」
「マジかよ～。これでも小生気にしたつもりだったんだけどな」
「お前の一人称の守備範囲は広すぎだろ・・・・」

俺はそう呆れながらずれ落ちたスクールバックを担ぎなおす。
その隣では勇利が”う～ん・・・何で変わっちゃうんだろうな～”と呟きながら歩いている。
そんな俺たちはそれぞれちょっとした癖で中学時代こう呼ばれていた。
『残念イケメン』と。
?.?.?.?.?
時と場所が変わって、ここは俺の教室。
まだ朝早いので、今は勇利と俺しかいない（と言っても勇利はクラスが違う）。
まぁ、いつも一番乗りなんだけどな。
「そんなこともあったなぁ～。『残念イケメン』なんて言われたことが」
「俺も勇利も変な能力っつーか、変な癖っつーか、まぁ残念と言われて思い当たる節はあるよな」
「だな！俺は一人称がおかしくなるし、結祐は女嫌いだもんな」
「別に女嫌いではねーけどな」
「お？じゃあ結祐も彼女とかほしかったりすんの？ｗｗ」
「・・・思っちゃ悪いか」
「べっつに～♪じゃあなおさらそれ治さないとね～」
「お前もな」

そう言って俺たちは顔を見合わせた。

っつか、俺も勇利もイケメンなのか・・・？
勇利を見ても鏡を見てもそうは思わねぇんだけど・・・。

と軽く首をかしげると、どうやら勇利も同じことを考えていたらしく、

「やっぱ結祐イケメンって程じゃないな～。俺もだけど」
「だよな！そもそもイケメンの『イ』の字もねぇもんな」
「うん。だよな～。なのに残念とか言われちまってて。あんまりだよなぁ～」
「まぁ、それも中学時代の話だけどな」
「だな！今となっちゃ俺はただの変人。結祐はただの変態だもんな！」
「勇利、お前には死んでも言われたくねぇよ・・・」

そう、なつかしく悲しい『残念』時代を思い出し俺たちが笑いあっていた時、教室のドアががらっと開いた。

「あ、結祐。おはよう。っていうか、クラス一緒だったんだね」
「あぁ、梓か。どうやらそうみてぇだな。俺もビックリだわ。つかどうした？早いな」
「うん！今日は初めての軽音部だから早く学校に行きたくて！」
「あ、そっか。今日から練習だもんな。梓はギターか？」
「うん。小学生のころからやってるしね」

そう言いながら、俺の右斜め前の席に梓は座った。

席近っ！！。

多分、初日の自己紹介とか日中はほとんど気絶して保健室だったから分かんなかったんだな、お互いに。

そう思っていると、梓が自分の席に荷物を置いてこっちによってきた。

「結祐はなにをやるの？」

「まだ決まってねぇよ。とりあえず俺音楽知識０だし、先輩たちに聞いてから決めようと思ってな」

「そっか。それにしても、結祐が昨日舞台に上がった時はビックリしたよ。最近会わないな～とは思ってたけど、まさか同じ学校のおんなじクラスとは思わなかったし」

「それは俺も――――――――」

「ちょっと待ったぁ！！！」

今まで呆けていた勇利の横やりの一撃によって俺の言葉は遮られた。

つか、声でか！

梓までビクッちゃってんじゃん。

「結祐君。これはどういうことだい？」

「どうもこうも何が？」

「だ・か・ら。いつからお前はこんな可愛い女子と喋れるようになったんだよ！？ずるいぞオイラを置いて！」

「あぁ・・・そういうことな。そういやお前は梓のこと知らないもんな」

「いや。名前と顔は知ってるぞ！小柄な体と若干ツンツンしていそうな雰囲気で”ツンデレ妹属性”の異名を持つ中野梓ちゃんだろ！？一部の男子に人気なんだぞ！！」

「へっ！？そ、そんな・・・・」
「おいおい、なにを言ってんだお前は。梓照れちゃってんじゃんか」
「照れてる姿も可愛いなぁ・・・・。ってそんな事は今はいい！！問題はなぜそんなに可愛い梓ちゃんと貴様のようなヘタレクズ野郎がつるんでんだってことだ！！」

勇利はそこまで一度もかまずに言いきると、”うわぁぁぁあああ”と言いながら頭をかきむしり始めた。
梓は梓でまだ照れっぱなしだし。
なんなんだこの光景・・・。

でもまぁ、勇利がそう言うのも仕方ないよな。

確かに梓と俺は幼馴染だけど、梓は市立の中学校。
俺と勇利は私立の中学校だったから、直接的に勇利と梓の接点は無かったしな。
そりゃ、勇利から見れば俺が梓と喋ったりしてんのは不思議に感じるわけだ。

ましてや、幼馴染だから梓じゃショートしねぇしな。
なおさら不思議だったんだろうな。

そう考察したところで、とりあえず俺は悶えている勇利を鎮めることにした。

「え～となぁ、勇利」
「なんだよっ！裏切り者！！」
「いや、俺は別にお前を裏切ったりなんかしてねぇよ。俺と梓はただの幼馴染だから」
「へ？」

「だから幼馴染。生まれた病院も幼稚園も小学校も一緒だし、家も道を挟んで隣なんだよ。な？梓」
「え！？あ、うん。そう。そうだよ！」
「じゃ、じゃあ、お前は俺を置いて行ったわけでも、梓ちゃんをGETしたわけでもないと？」
「もちろん」
「よかったぁ～！！吾輩てっきり梓ちゃんと結祐はそういう関係かと・・・・・」
「アホだなぁ。勇利」
「あぁ！俺がアホだった！！結祐！やっぱりお前は最高の友達だ！！」

そう言いながら、勇利が俺に抱きつこうとしてきたため、俺はそれを足で蹴り飛ばして防ぐ。

そんな状況をちょっと引き気味で見つつ梓が俺に尋ねてきた。

「あのさ結祐。その人は？」
「あぁ、こいつは篠原勇利。見ての通り変な奴だけど根っこはいいやつだから。仲良くしてやってくれ」

そう言って俺は勇利を梓の前に突き出した。

梓はちょっとうろたえていたが、俺の目を少し見るとおずおずと自己紹介を始めた。

「中野（なかの）　梓（あずさ）です。え～と・・・・」
「篠原勇利です！！勇利って呼んでください！！」
「え～と・・・、じゃあ、私も梓でいいよ」
「マジで！？やった～！！それじゃあ、よろしくね梓ちゃん！！」

「うん。よろしく勇利。ところで、さっき言ってた事なんだけど・・・・・ホント？」
「ほんとだよ！梓ちゃんホントに一部の男子に人気あるから！！」
それを聞いて梓は再び照れ始めた。
ま、でも勇利のその情報は嘘じゃないだろうから俺が何か言う必要もないだろ。
にしても、勇利もよく堂々と言えたもんだな。
そもそもこの学年男子が２５人しかいないから、一部んて言ったら精々１～２人だろ？
それに気がつけば、あんなの勇利が梓のこと好きだって言ってるようなもんじゃねぇか。
まぁ、気がつかれないようにそう言うこと言うのは勇利の得意分野だしな。
っつか、何人にあんなこと言ってんだろう・・・・・・？
と、俺がうれしそうにしている勇利と若干引き気味の梓を見て苦笑いしていると急に先生の声が飛んできた。
「お前ら、何やってんだ！？今日は朝会だから登校したら荷物持ったまま講堂に集合だぞ！！」
「あ、そういや、この学校って朝会の時教室に荷物置かずに直で行くんだっけ？」
「つべこべ言わんで早く行けっ！！」
「「「は、はいっっ！！」」」
そう３人そろって叫びながら俺たちは講堂へ向かった。

？？？？？

時と場所が再び変わって放課後。

勇利はあの後休み時間になるたびに俺のクラスに来て梓や憂と話していた。

ま、仲良くなったんならそれでよし。

「んじゃ、行くか」

「うん。早く行こ！！」

梓はそう言って、まるで子供のようにはしゃぎながら音楽室へ走って行ってしまった。

と、思ったら、

「結祐、はやく！！」

階段とこで待っていたのか。

ったく、しゃーねーなぁ。

「今行くって」

「楽しみだな～軽音部。どんな練習するんだろ？」

「そうだな～。例えば、お茶を――――――」

「言わないで結祐！！私の目で確かめたい！」

「・・・・気合入ってんな～」

「だってあんなに感動する演奏できるんだもん！きっと凄い特訓とかしてるんだよ」

「前半だけ同意しといてやるよ」

そう他愛のない会話をしているうちに部室の前についた。
のだが、梓は緊張しているらしくドアを前にして止まってしまった。

・・・・マジで子供かよ。

そう思いつつ、俺はドアを開けた。
その瞬間、

「こんにちわ！！」

梓が部室に飛び込んだ。

ドアが開いたら俺は用済みかよ。

「こんにわーっす」
「おぉ！二人とも来たか！」

そう言ったのはおでこが特徴的なドラム担当の田井中先輩。
ボーイッシュな先輩で、身内と梓以外で唯一俺がショートしない人物だ。

他にも憂の姉の平沢先輩、まゆげ（剛毛ではない）が凄い琴吹先輩が既に来ていた。
ちなみに田井中先輩だけしっかり説明したのは、田井中先輩のみ直視することができるからだ。

ふ・・・何たる悲しい事実。

「お、おいユウ。なんか哀愁漂ってるけどだいじょうぶか？」
「え？大丈夫っすよ」

以後ナーバスにならないよう気をつけよう。

「それにしても、梓は元気いっぱいだな」
「はい！放課後が楽しみでした！！」
「そっか～。それじゃあとりあえず――――――」
「練習ですか！？」
「お茶にするか」
「え・・・？」

そう呟いた梓はホントに拍子抜けした顔をしていた。
しかし、梓は新入部員。
先輩に無理に逆らうこともよろしくないので、おとなしく席に着いた。

もちろん俺もだ。
そのあとはもう梓が何か言う隙は無かった。

「はい、梓ちゃんも、結祐くんもどうぞ～♪」
「あざっす」
「ありがとうございます」

とお茶が配られ、

「お菓子もどうぞ♪」

とケーキが置かれ、

「わーい♪ケーキ～」
「うまそー♪」
「ありがとなムギ」
「いいのよ～」

といつの間にか合流した秋山先輩を含む先輩が全員食べ始めてしまったからだ。

「あの、これって・・・」
「あぁ、梓も食べろよ。おいしいぞ～」
「いや、だからその・・・・」
「なんか不満なのか？梓。先輩たちに言えば多分コーヒーも紅茶もミルクティーも出てくるぞ」
「いや、結祐。そうじゃなくて。音楽室をこんな事に使っていいのかなって・・・・」

梓はそう言いながら下を向いた。

・・・・これはヤバいかもな。

今までの経験で俺はそう思った。

何故なら、梓は真面目すぎるからだ。
それゆえ、このような気が抜けた状況に長く居座ると我を忘れて暴走することがしばしばある。

最初から懸念はしてたが、思った以上に気をつけないとな・・・。

そう俺が心の中で決意した時、

ガチャ・・・

と、山中先生が入ってきた。

それを見て梓が急に強張る。

きっと、音楽室でお茶していることを怒られるとでも思ったのだろう。

「あ、あの先生これは・・・・！！」

「あ、私ミルクティーね」

「あれ？先生・・？」

再び梓が拍子抜けした表情になる。

これはヤバい、やばすぎる・・・！！

「あ、新入部員よね？」

「あ、はい。中野梓です」

「私は顧問の山中さわ子です。よろしくね♪」

「顧問だったんすか！？」

思わず横槍を入れてしまった。

だって、顧問なんて昨日は一言も言ってなかったし。

「あら、結祐くん知らなかった？」

「初耳っすよ。俺、てっきりただの変態音楽教師としか『おいコラ！』・・・嘘っす」

「それにしても新入部員か～。春ねぇ～」

「新しい彼氏できたかさわちゃん？」

「余計なお世話よ！ほっといて！！」

「ごめんごめん。悪かったって～」

「そういうりっちゃんはどうなのよ？」
「私はそういうのは・・・・・・・」

・・・・ヤバいヤバいヤバいヤバい！！
俺もついついこのムードに乗っちまったけど、これはまずい。
梓が、暴走しちゃう・・・！！

そうお思いつつ、ちらっと梓を見てみるとなんだか難しい顔をしていた。

どうした？

そう声をかけよとした瞬間、梓は急にすくっと立ち上がった。
そして迷わずギターを肩にかけ、

ジャーン♪
「うるさぁーーい！！」

怒号が飛んだ。

・・・これは予想外だ。
梓が暴走せずにギター弾き始めたのもそうだし、山中先生が怒ったのに関してはもう意味不明だ。

と、とりあえず、梓だ。
泣きだしたらかなわねぇ・・・！

そう思い俺は梓に駆け寄ろうと思ったのだが、既に秋山先輩がフォローに回っていた。
じゃあ、先生の方をと今度は先生の方をみたのだが、先生は先生

で田井中先輩に怒られていた。

やっぱ大事な後輩のこととなれば怒るよな。

ま、なにはともあれ先輩たちのおかげでなんなく収束できそうだ。

そう安堵の息をついた瞬間だった。

「こんなんじゃ駄目ですーーーっ！！」

あぁ、はじまっちゃった・・・。

「あ、梓がキレた！？」

「ユウ幼馴染だろ！？どうにかしろ！！」

「こうなったら止めようがないっす」

「そんな！？」

そう絶望している田井中先輩をよそに梓の暴走は加速する。

「皆さんやる気が感じられません！！」

「「「「うっ・・・・」」」」

「ま、まぁ梓。先輩たちも昨日新歓ライブだったんだし・・・・」

「関係ありません！！それに音楽室を私物化するのもダメです！！ティーセットは撤去すべきです！！」

「て、撤去・・・」

「それだけは勘弁を～・・・・」

「何で先生がそんなこと言うんですか！？」

「ま、まぁ、落ち着けって」

「これが落ち着いてられますか！？」

あ～・・・。

もう俺の手には終えねぇ。
・・・・あと１０分は続くかな。
俺がそう思ったその時、
「落ち着いて～」
と、平沢先輩が梓を後ろから優しく抱きしめた。
「「「「いや、そんなんで収まるわけ」」」」
そう言うかけた時、
「はぅわ～」
「「「「落ち着いてる！？」」」」
？？？？？
「さっきはすいませんでした！」
まさかのハグで正気に戻った梓の第一声はそれだった。
対して、田井中＆ａｍｐ；平沢両先輩の第一声は、
「大丈夫だよ、気にしてないから」
「いや、気にしましょうよ・・・・」
「そうだな。梓の言うことも一理あるしな」
そう秋山先輩が味方についてくれた。
が、梓は相変わらず下を向きっぱなし。

そうとう後悔してんだろうな。
とにかく今後はこういうことがない様にしねぇと。
そう決意し、生意気と言われるのを覚悟で練習しましょうというつもりだったのだが、秋山先輩が代わりに言ってくれた。

「これからはもっとやる気だして出していかないとな。わかりましたね！？」
「「「はぁーい」」」

こうして、梓の軽音部デビューは最悪の状態で始まった。

## 第六話　?新入部員???（後書き）

次回は・・・・

『はぁ～・・・・。行きたくないな～』

『はわわわわわーーーーっっ!!!』

次回【新入部員?』

## 第七話　?新入部員???（前書き）

新入部員?です。

読んだら感想くれるとうれしいです。

それではどうぞ！！

# 第七話　?新入部員???

またまたこれはいつもの登校風景。
ただし、メンバーは増えたけど。

「はぁ～・・・。今日は部活行きたくないなぁ・・・・」
「そんなに落ち込んでどったの？梓ちゃん？」
「ちょっとね・・・。あ、『梓ちゃん』って呼ばれると変な感じがするから、『梓』にしてもらっていい？」
「え？まぁ・・・・。意識してみるよ。それより本当に大丈夫？僕でよければ相談に乗るよ？」
「あ～そのへんにしとけ勇利。誰だって話したくねぇ事はあるだろ」
「まぁ、それもそうだね。じゃあ、なんかあったら小生に相談してね」
「小生・・・？なにそれ？」
「そんな梓に結祐くんの分かりやすい解説～。『小生』とは古文などで使われる一人称のひとつです！！」
「勇利は古文にはまってるの？」
「吾輩？はまってるわけ無いじゃんか～」
「今度は吾輩・・・！？」
「再び結祐くんの解説～。勇利は一人称を無意識に変えてしまうという摩訶不思議な癖を持っています。ちなみにそのバリエーションは今まで確認したもので６種類！！・・・・・ぐらいだったきがする」
「へ、へぇ～。なんか面白い癖だね」
「そんなことないよ～。これのせいで気持ち悪がられたり残念とか言われたり・・・。拙者はいつも気をつけているのになぁ～」
「「拙者！？」」

こうして、他愛のない会話から俺たちの一日はスタートする。

?.?.?.?.?

「終わったーーーっ！！」

ＨＲ終了のチャイムとともに俺はそう叫んでいた。

先生の目の前で。

いや、正確には、俺が身体を起こして叫んだら目の前に先生がいたってほうが正しいかな。

・・・・・・うぅ。

ベテラン教師特有の冷たい目線が痛い。

くそっ！こうなりゃ、何か言うしかない！！

「先生、また今日は一段と老けてますね♪」

「はぁ・・・。全く誰のせいだと思っとるんだ・・・。もういい。号礼は無しだ、これでＨＲを終わる」

そう言って、先生は深いため息をつきながら教室を出て行った。

ありゃあまた老けるな。

「それにしても、勉強ってめんどくせぇなー」

「しょうがないよ。それより結祐くん！今日は一回も気絶しなかったね！！」

「確かにそうだな。つっても、ほとんどの授業寝てたんだけどな」

「それはよくないと思うけど・・・。でも結祐くんちょっとずつ治ってきてるみたいだね。軽音部の影響？」

「あぁ・・・。それが大きいな。特に憂、お前の姉ちゃんは無自覚に目を合わそうとしたり、面白がって手を繋ごうとしたりしてくる

もんだからたまんねぇよ」
「それは確かにたまらんな！」
「「勇利（くん）！？」」
ほんとにコイツは神出鬼没だな。
でもまぁ、楽しいやつだからいいけど。
「いいなぁ結祐は」
「何がだよ？」
「軽音部だよ軽音部！お前以外全員女子だろ？たまらんだろ！！」
「確かに、私も学校で放課後までお姉ちゃんと一緒にいれるなんて思うと・・・・いいなぁ」
「お、憂ちゃん！話しが合うね！！」
「そうだね！そういえば何で勇利くんは部活に入らないの？」
「確かにな。憂は家の家事があるって理由があるけど、暇人勇利には無いもんな」

そう俺が若干皮肉をこめて言うと。
話しに入るタイミングをうかがっていた梓が口をはさんだ。

「勇利はちょっと変な子だからどの部にも入れなかったんじゃないの？」
「ひどいよ梓！俺そんなに変な奴じゃないよ！！」
「「どーだかなー？」」
「結祐まで・・・！！ヒドイよっ！！よってたかって某（それがし）をいじめて・・何が楽しいんだ！？」
「お、某だって。新種の一人称だ」
「人の話を聞いてよ・・・・」

そう呟くと、勇利は俺の席に突っ伏してしまった。
だが、梓と俺は大体勇利という人物像を分かっているので拗ねても特に相手にしない。
そんな俺たちの代わりに憂が勇利を元気づけていた。

いや、元気づける前に、憂が声掛けた時点で”憂ちゃんありがと〜！！”と復活していた。

本当に根っからの女好きだなコイツ。
ほんとに彼女作る気あんのかよ・・・？
そう俺が呆れたようにため息をついたとき、同時に隣で梓もため息をついていた。

まぁ大体予想はつくけど。

「昨日のことか？」
「うん・・。昨日迷惑かけちゃったから、あんまり行きたくないなぁって・・・」

そう言って梓は、うつむいてしまった。

真面目すぎなんだよな昔から。
だから、考えすぎちゃうんだろう。
ま、そういうときは俺が背中を押してやらねぇと。

俺はそう思うとスクールバックを肩にかけ、梓の手をつかんだ。
突然のことに梓は若干戸惑っていたが、俺は気にせず梓の手を引っ張った。

「何やってんだ。行こうぜ」
「でも・・・」
「でもじゃねぇ。どの道行かなきゃ始まんねぇだろ？」
「そうだね。でも先輩方怒ってないかな？」
「なぁに、俺がついてる。そんときゃなんとかしてやるよ！」
「・・・・ありがと結祐」

そう梓が呟いたのを聞き、俺はもう一度梓の手を引っ張った。
今度は抵抗なく梓もついてきてくれた。

さぁて、先輩たちのことだから怒ってはないだろうけど・・・・・
さすがに今日も練習せずにお茶なんてことはないよな？

そう一抹の不安を覚えながら俺と梓は部室へ向かった。

そのとき、勇利の殺すような視線が俺の背中を貫いていた気がしたけど、まぁ気のせいだよな。
・・・・・そう信じることにした。

？？？？？

「こんちわー」
「こんにちわーって」

「「（全然懲りてない！！）」」

思わず、梓と全く同じリアクションをとってしまった。
でも、またお茶してんだもん。
昨日あんだけのことあったのに・・・・。

「先輩、練習はどうしたんすか？」
「「「はわわわわわーーーーっ！！」」」
驚きすぎだろ。
ま、でもこれで練習に繋がるなら良しか。
「い、今からやろうと思ってたんだぜ！！」
「そ、そうだよ！ね、ムギちゃん！」
「そうそう！！」
「あの、やる気があるのは結構ですけど、見苦しいっすよ」
「な、何がかな～？」
「と、とにかく練習しよーー！！」
田井中先輩のその掛け声で”おー！”と言いながら平沢先輩がギターを持った。
しかし、
「ケーキがないとやる気が出ない～」
1秒持たなかった。
まったく、ホントに大丈夫かよこの軽音部。
「唯ちゃん。ケーキよ。はい、あーん♪」
「ありがとムギちゃん。・・・はむっ」
～♪♪♪
「す、凄い演奏だ！」
「凄い・・・・」

そう俺たちが感嘆したのもつかの間で、その5秒後には、

「もうだめぇ～」

へばった。

集中力無さ過ぎだろ。

そう俺が頭を抱えていると、同じく隣で頭を抱えている梓に平沢先輩がよってきた。

それを確認した瞬間、俺は反射的に平沢先輩から離れていた。

我ながら素晴らしい反射神経だ。・・・・・多分。

そう自画自賛（？）している間に、平沢先輩がケーキを梓に食べさせようとしていた。

「梓ちゃん、あ～ん」

「え？でも・・・・」

「いいから、いいから～」

「う・・・・。で、でも・・・・」

「はい、あ～ん♪」

「・・・・はむっ！はぅわ～・・・・・」

はい、梓陥落。

いともたやすく落ちたな～。

ま、それはそれでいいか。

そう思いながら、俺はお茶用の席からちょっと離れた椅子に座った。

すると、

「はい。結祐くんも、あ～ん」

と、琴吹先輩が突如ケーキを持って俺の目の前に出現した。

・・・・・はい、俺陥落。

「あれ、結祐くんいらないの？」

「あ、えっと・・・。意識が危険なんでほっといてもらってもいいすか？」

「あら♪目が合っちゃってたかな？ごめんね結祐くん♪」

そう言って琴吹先輩はおれの前から立ち去った。

・・・・あの人絶対俺で楽しんでやがる。

今後は琴吹&平沢両先輩には気をつけようと決意したその時、梓も平沢先輩に遊ばれていた。

具体的にどのようにかと言えば、

?ケーキ↓梓

梓「ぱぁぁぁぁっ！！」

?ケーキ↑梓

梓「ズーーーン・・・・・・」

?ケーキ↓梓

梓「ぱぁぁぁぁっ！！」

?ケーキ↑梓

梓「ズーーーン・・・・・・」

の繰り返しだった。

ただ、ケーキの位置によって変わる梓の表情を見てこの場にいた全員は同じことを思った。

「「「（梓ってわかりやすくて、おもろい）」」」

？？？？？

「「せんせーさようなら～」」

「はい。さようなら」

私は山中さわ子。

軽音部の顧問です。

さて、いつもならこのまま部室に言ってお茶なんだけど、

「ティーセットは撤去だもんな・・・。よぉーし！ちょっとは教師らしくするぞぉー！！」

そう決意して私は部室に向かいました。

なのに・・・・

？？？？？

「みんな～、練習やってる～？って食べてんじゃん！！」

それが部室にきた山中先生の第一声だった。

ま、でもしょうがないな。

昨日はあんだけ”撤去だーー！！”って言ってたしな。

そう俺は思いながら、琴吹先輩がくれた紅茶を一口飲んだ。

それと、ほぼ同時に山中先生が超高速で席につきケーキを食べた。

「・・・・私、今死んでもいい」

「「おーい。戻ってこーい」」

「あ、そうそう。そういえば何でティーセット撤去しなかったの？」

「「切り替え早っ！！」」

そう二回目のハモリを難なくこなした俺と田井中先輩を無視って山中先生の視線は梓を捉えていた。

さぁ、なんて答えるんだ梓？

『ケーキにつられました』か？

「な、なんでもかんでも否定するのはよくないと思って・・・」

そう言った梓を先生以外がジト目で見つめた。

が、当の梓はやり過ごせたと安心してそれに気が付いていない。

・・・つまんねぇな。

そう俺が思った時、急に先生が手を叩いた。

「そうそう。私、梓ちゃんにプレゼントがあるのよ！」

そう言って先生はごそごそと何かを探しだした。

そして、出てきたのは、

「せ、先生。それは・・・？」

「ん？ネコ耳よ」
「それは分かりましたけど、これをどうしろと・・・？」

そう梓が言った瞬間、先生がものすごいスピードで梓の後ろに回り、肩をガシっと掴んだ。
数秒遅れて梓はそれに気が付き急いでその手を振り払った。

「な、なにするんですか！？」
「何って、ネコ耳つけるだけよ？」
「そんなの嫌です！先輩たちも嫌ですよね！？」

「ムギちゃん似あう～♪」
「さすがムギだな！」
「ありがとね♪」

「（つけてるっ！？）」
「さぁ、みんなもつけてるじゃない！観念しなさい」
「そんな・・・。結祐！！」

「ゆーくん狼みたいだね～」
「ワオーッってやってみろよ、ワオーッって」
「ワオーッ！！」
「わぁ、似てる♪」

「（結祐まで・・・）」
「さ、次は梓の番だ」
「うぅ・・・。ホントにつけなきゃダメ？」
「ガキの頃はよくつけてたじゃんか」
「それは幼稚園の頃！」
「まぁ、いいからつけてみろって」

「うぅ・・・・・」

そう言いながら梓はネコ耳を装着した。

「変じゃない？」

「別に。可愛いと思うぞ俺は」

「んじゃ、ニャーってやってみろよ！にゃーって」

「にゃ、にゃー・・・・」

「「「「（か、可愛い・・・・）」」」」

どうやら梓のネコ耳はなかなか強い作用を秘めてるらしいな。

俺以外の見ていた人間が天に召されてしまった。

が、先輩たちはすぐに天から帰ってきた。

そして

「梓ちゃんかわい～♪」

と、平沢先輩が梓に抱きついた。

全くこの人は・・・・。

「今日からあだ名はあずにゃんに決定だね！」

「え・・・・？」

「う～ん。可愛い～」

そう言いながら、平沢先輩は困惑する梓に頬ずりし始めた。

そして、それを俺を含む軽音部は全員ほほ笑んでみていた。

こうして、今日も練習時間が削られていくのだった。

## 第七話　?新入部員???（後書き）

次回は・・・・

『って言うか慣れたくない・・・』

『俺はそれでも、あのメンバーが好きなんだよ。きっと』

次回【新入部員?】

## 第八話　?新入部員???（前書き）

新入部員?です！

やっと、シリアス展開若干突入です！
また、結祐の特技が出てくるかも・・・・・。

読んだ後は感想をくれるとうれしいです。
また、その際には悪いところも書いてくれるとそれを見てよりよくしていくのでよろしくお願いします。（ただし、作者を誹謗中傷するものはこの作品に関わらず全ての作品でやめてください）

では、どうぞ！！

## 第八話　？新入部員？？？

またまたまたこれはいつもの登校風景。
ただいつものと違うのは、

「勇利めずらしいよな。朝寝坊なんて」
「そうだね。・・・なんか勇利がいないとちょっと寂しいよね」
「だな。なんだかんだであいつはムードメーカーだったしな」
「・・・そういえば結祐ってどこやるか決めたの？」
「う～ん・・。まだ。でもヴォーカルやろうかなって」
「結祐歌うの！？」
「楽器できないし、俺の特技考えたらそれが現実的だろ？」
「まぁ、確かにそうだね。っていうか、今日練習するのかな・・・？」
「だ、大丈夫！先輩たちだってそろそろやるって！」
「ホントに？」
「あ、あぁ。俺がなんとかする！だから梓は安心しろ！」
「うん。分かった」

そう言った梓の顔は、何だか納得しきれていない顔だった。

勇利と知り合って3回目の春。
俺は初めてあの勇利（アホ）の偉大さを知った。

？？？？？

授業を適当に流し放課後。

今日は純の策略により数回ショートしたが、もう誰にも相手にされなかった。
憂曰く『だんだんみんな慣れてきちゃったんだよ。でもそれって結祐くんのことをみんなが理解できてきたってことだよね♪』だそうだ。

それにしても、放置はひどい気がする・・・。

ちなみに勇利は結局学校を欠席したそうだ。
朝は『寝坊したから先に行っててくれ』としか言ってなかったのに、風邪かな？

そう、一応悪友のことを心配しつつ、俺は部室への階段を息を切らして駆け上がっていた。

一応説明しておくと、別に物凄く軽音部に行くのが楽しみなのではない。
まぁ、全く楽しみにしていないと言えば嘘になる。
けど、急いでいることには別の理由があった。
まぁとにかく部室で先輩たちに会わないと話しにならねぇ。

俺はそう思いながら部室のドアを思いっきり開いた。

「こ、こんちわー・・・。ぜぇ・・・はぁ・・・」
「あ、ゆーくん♪って大丈夫！？」
「だ、大丈夫っす。それより、先輩たち全員いますか？」
「いるけど、どうしたの？」
「大事な話があるんすよ。この部のことで」

そういいながら、俺はお茶用テーブルの俺の席と思われる場所に

すすんで座った。

先輩たちは、俺が息を切らして入ってきたことにも驚いていたが、すすんで座ったことにはもっと驚いていた。

しかし、俺がいつもよりちょっとピリピリしているのを感じ取ったのか、全員何も言わずに座ってくれた。

「んで、ユウ。大事な話ってなんだよ？」

「時間が無いんで単刀直入に言います。いい加減に練習しないとマズイです」

「そんなこと言ったって～。新歓終わったばっかじゃんか～」

「確かに先輩たちにとってはひと段落ですけど、新歓を見て入部した梓はやる気満々なんすよ。先輩たちだってわかりますよね？折角”やるぞーっ！！”って入部したのに練習できないとどう思うかくらい。第一、まだ梓は楽器にも触って無いんすよ？俺に至っては入部して一週間以上たつのにどこやるかも決まって無いし」

「あ、そういえばゆーくんどこやるか決めて無かったね。あずにゃんはギター持ってたからギターだと思うけど」

「よぉーし。それじゃあこれからユウがどこやるかを決め――――――」

「てる場合じゃないんすよ！梓は掃除当番だったからまだ来てないけど、もうすぐ来ます。俺のことはあとにして、まずは練習しないとダメっすよ！！」

「え～でもさぁ～・・・・」

と、俺の主張もお構いなしに田井中先輩がダレた。

こっちは真剣にこの部のことについて考えてんのに、いくら先輩でもいい加減に頭にくる・・・・・。

そう頭の中で俺の怒りが爆発しそうになった時、それを見兼ねた

秋山先輩が俺より先に言い放った。

「いい加減にしろ！！」

その一言で先輩たちの顔色が変わった。

同時に、言いたいことを言ってくれたので俺の怒りも徐々に収まった。

「結祐が言ってることはみんな分かるだろ！？梓だってもう私たちに呆れてきちゃってるんだ！今日こそ練習しなきゃ駄目だ！！」

秋山先輩がそう言いきると、若干沈黙が続いた。

そこまで事が進行して俺は始めて気がついた。

先輩たちの築いてきた軽音部なのにこんなこと言って、俺メッチャ生意気じゃね？

気がついた後は気が気で無かった。

もしかしたら言い過ぎたかも。

俺のせいで先輩たちの仲が悪くなったらどうしよ？

短い沈黙の間にそんな事が頭の中に渦巻いた。

でも大丈夫だった。

俺の生意気な言葉はキチンと届いていた。

「そうだな。澪とユウの言う通りだ」

「私たちのためにも、あずにゃんのためにも頑張んなきゃね！」

「私、今日はティーセットに触らない！！」

「よぉーし！！練習だ！！」

「「おーっ！！」」

そう言って先輩たちは準備しかけていたティーセットを片付け始めた。

その姿を見て俺は物凄くホッとしていた。

いや～、今の俺みたいな後輩が入ってきたら俺は絶対嫌いになるな。

そんなことを考えながら自嘲気味に苦笑いしていると、秋山先輩が俺に言った。

「ありがとな結祐」

「へ？」

言っている意味が分からなかった。

それでも秋山先輩は続けた。

「結祐がいなかったらきっと私たちは駄目なままだったから」

「い、いや、そんなこと無かったんじゃないすか？秋山先輩居るし、っつか俺、メチャクチャ生意気だったし・・・」

「確かに新入部員にしては生意気だったな」

「え？やっぱり印象悪かったすか？」

俺のそんなマジの問いかけに秋山先輩は笑いながら、ちょっと上から目線っぽかったしな、と言った。

・・・やっぱ生意気か～。

そう俺はちょっと気を落とした。

すると、秋山先輩はそれを見てか、それとも本心なのか、それは秋山先輩を直視できない俺にはわからないが、こう付け加えた。

「でも、私たちには、私たちに気を使わずに一番私たちのためになることを言ってくれる結祐みたいな後輩が必要なんだよ。少なくとも私は今のやり取りでそう思った」

その一言で、俺は目があったわけでもないのに頭がぽーっとなった。

その直後、言葉の意味がきちんと解読されとたんに恥ずかしくなった。

何か言わなきゃとは思ったけど、言葉が出てこなかった。

結果、硬直した。

そんな俺を平沢先輩が呼んだ。

「ゆーくん。澪ちゃん何やってるの？早く練習しようよ！」

「そうだぞ。練習しようって言った二人がこなくてどうすんだよ～」

「ごめんごめん。すぐ行く」

秋山先輩はそう言って、自分のベースギターを肩にかけ、定位置についた。

一方俺は、なんだかぼーっとしたまま先輩たちの前の椅子に座った。

「1，2，3，4――――――」

その田井中先輩の掛け声で演奏が始まった。

だが、音楽は右耳から左耳へ抜けていくばかりだった。

それほどに、進路まで人任せにして適当に生きてきた俺の存在が必要とされたかもしれないという事実は、俺の心を揺さぶっていた。

？？？？？

『ララ☆また明日～』

と、丁度『私の恋はホ〇チキス』が終わった時、勢いよくドアが開いて梓が飛び込んできた。

そして、楽器を持つ先輩たちを見て一言。

「練習してる・・・・！？」

「あたりまえだよあずにゃん！私たちは軽音部なんだもん！ふんすっ！！」

「昨日までお茶していた唯はいばれないぞ～」

「そ、そんなぁ！？そんな事言うならりっちゃんだって！！」

「私はいばってないぞ！！と、そんなことは置いといて、梓もいっしょにやろうぜ～」

そう田井中先輩に言われ、梓はうれしそうにギターを出した。

「さてと、そういえば確認しなかったけど梓はギターでいいんだよな？」

「はい！唯先輩と一緒です！！」

「それじゃあ、リードギターを決めないとな。どっちがやる？」

その田井中先輩の問いかけに、即座に平沢先輩が反応した。

具体的に言うと、目を輝かせて田井中先輩を真っ直ぐ見つめた。
その目は”りっちゃん私に！！”と訴えかけていた。
ま、先輩風でも吹かせたいんだろうな。
「・・・じゃ、唯でいいけど、一応梓の実力も見せてくれるか？」
「あ、はい。それじゃあ・・・」
そう言って梓はギターを肩にかけなおす。
そして、
～♪～♪～♪
明らかに平沢先輩より演奏をした。
俺は何度か聞いたことがあるのでさほど驚かなかったが、先輩たちは呆気にとられていた。
やがて、それに気がついた梓が慌てだす。
どうせ「（やっぱり聞き苦しかったかな・・？）」などと焦ってんだろ。
明らかに梓のほうがうまいのに。
と、内心慌てているであろう梓を見ながら、俺にギターの道は消えたなと確信した時、やっと先輩たち戻ってきた。
「メチャクチャうまいじゃん！！」
「梓ちゃんすご～い！」
「・・・唯と同じ、もしかしたらそれ以上かもな」

「これは唯のと聞き比べる必要があるな」

その田井中先輩の一言で全員の視線が平沢先輩に集中する。

さぁ、平沢先輩どうする？

「え～と・・・。はうっ！！ぎっくり腰がぁ～・・・」

「「「見苦しい（っす）」」」

俺と田井中先輩と秋山先輩の的確なツッコミが平沢先輩のハートをブレイクした。

そして、

「あずにゃ～ん。ギター教えて～！！」

「「「変わり身はやっ！！」」」

先輩としてのプライドは消え去ったらしい。

？？？？？

平沢先輩が泣きついたこともあり、今は個人練習だった。

言うまでもないが、平沢先輩は梓による個人レッスン中。

また、田井中先輩は走り気味になるのを直すために、琴吹先輩と練習中だった。

こうなってくると、どこをやるかも決まっていない俺は暇人になってしまうのだ。

さて、何をすべきか・・・？

そう俺が思った時、秋山先輩が声を掛けてきた。

その瞬間に俺は目を逸らした。

「そういえば、結祐はどこやりたいんだ？」
「唐突っすね。まぁ、どこでもいいすけど、ギターは勘弁っすね。梓にゃ敵いっこないし」
「ははっ。確かにそうだな。じゃあ、ベースやってみる？」
「う～ん。確かにベースもいいっすね。でもドラムやキーボードも捨てがたいし・・・・」
「そういえば、結祐って音楽経験あるんだっけ？」
「無いっす。だから、どこをやるにしても時間はかかるんすよ」
「そっか。じゃあ、急がないでゆっくりやりたいところを探すと良いよ」
「そうっすね」

そう言って、俺は自分がベースやらドラムやらキーボードやらをやってる所を想像した。
・・・・似あわない、気がする。

そう苦笑いした時、ふと朝自分が言ったことを思い出した。

「あ、そういや、俺やりたいとこありました。っつか正確にはやれること」
「え？結祐、何か出来るのか？」
「はい。俺、ヴォーカルやろうと思ったんすよ」
「ヴォーカルって、歌うのか？」
「はい。俺、歌うの得意っつか、喉だけが自慢なんで」
「喉？」
「はい。まぁ、言うより見せたほうがはやいっすね」

俺がそう言うと、秋山先輩は軽く首をかしげた。

ま、なに歌うのかとか、そんなこと考えてるんだろ。
と、俺は頭の片隅で予想しつつ、いつもの様に声を出し始める。
「あー、あー、あー・・・」
その声は徐々に高音になっていき、
「あーいーうー・・・まぁこんな感じか」
そして、俺は言い放った。
『こんにちわ。平沢唯です』
「「「「・・・・は？」」」」
自主練だったのに先輩たちの声が見事にハモった。
とはいえこのリアクションは想定内。
だって、男の俺が”完璧に”平沢先輩の声を再現したんだから。
『これが私の特技です♪』
「ゆ、唯。今喋ったか？」
「ううん。私何も言ってないよ」
「じゃ、じゃあ澪。今の声は結祐から確かに出てたか？」
「うん。信じられないけど。はっきり結祐から唯の声が・・・・」
『すごいでしょ～♪』
「「「「えーーーーっ！？」」」」

またまた先輩たちのリアクションがかぶった。
打ち合わせしてるんだろうか？

そんな事を考えつつ俺は声を元に戻した。
声を合わせるのは大変だが、戻すのは簡単なのだ。

「あー。直ったな。つーわけで俺の特技は『声マネ』です。まぁ、別に誰かの声を再現しなくても高音や低音出るんすけどね」
「ゆ、ゆーくんスゴ～イ・・・・・」
「ほんとね～・・・・」
「結祐・・・すごいな・・・」
「な、なぁユウ。それって誰でも可能なのか？例えばムギとか」

そう田井中先輩からリクエストがあったので、俺は軽く発声し音を合わせる。

・・・・よし。こんなもんか。

『みんな～。お茶にしよ～♪』
「ムギだ！！」
「ムギちゃんそっくりだ！！」
「わぁ♪私にそっくり・・・・」
「ホントに凄いな。どうしてそんなことできるようになったんだ？」

秋山先輩がそう聞いてきたので、俺は何となく秋山ＶＯＩＣＥで返してみた。

『お母さんがオペラ好きで、その真似をしていたらいつの間にか大抵の声は再現できるようになったんだ』
「おぉ！澪の声！！」

「なんだか恥ずかしいな・・・。でも、凄いな。真似してただけで自然にできたなんて」
『そうかな？』
「なぁなぁユウ。何でもいいけど、その声で『萌え萌えキュン？』って言ってくれ！！」
「それ私も聞きたい！！」

・・・言えるか。
そう思ったが、田井中先輩と琴吹先輩の目が期待している。・・・気がする（実際には見て無いから）。

まぁ、どうせ秋山先輩の声だし、いいか。
そう思って、

『萌えも――――――――』

と言おうとした瞬間、

「やめてぇぇぇぇ！！！」

という声とともに、俺は秋山先輩に取り押さえられた。
そして、当然の如く。

しゅぅぅぅ～～～～～・・・・・・

ショートした。

？？？？？

「ふぅ～。今日はしっかり練習したな～」

「そうだね、りっちゃん！いつもの十倍は練習したね！」
「はぁ～。指がもうくたくた」
そんなことを言いながら先輩たちは楽器を片付け始めていた。
まぁ、西日も大分差し込んできたし、練習終わるには良い頃合いだろ。
・・・・後半あんま練習してなかった気がするけど。
そう思いながら、俺も適当に荷物をまとめていると、
「すいません。ちょっと、用事があるんで早く帰ります」
「ん？そっか。んじゃ、また明日な梓」
「じゃあね～あずにゃん」
「また明日～」
「じゃあな梓」
「はい。それでは」
と言って、梓が部室から出て行ってしまった。
あいつどうせ用事なんか無いんだろうな。
そう思った俺は梓を追いかけることにした。
直感でそうするべきと思った。
「すいません。俺も帰ります」
「そっか。んじゃな～ユウ」
「ゆーくん、ばいば～い♪」
「またな結祐」
「また明日ね～」

「はい。んじゃ」

そう言って、俺は部室を後にした。

そして、先に帰路についている梓を追いかけた。

?.?.?.?.?

「おい！梓！」

そう声を掛けられたのは学校から出てわりとすぐだった。

・・・結祐にはどうせ嘘ついたのばれてるんだろうな。

「はぁ、はぁ・・。ったく置いてくなよ。せめて俺を待ってくれたっていいだろ？梓が帰りたかったのも分かるけどさ」

「やっぱり気がついてた？」

「まぁな。だてに幼馴染やってねぇし。それより、あの部には慣れたか？」

「う～ん。微妙かな」

「まぁ、そのうち慣れると思うぞ。俺みたいに」

「そうかな・・？（っていうか、慣れたくない）」

そんな事をついつい声に漏らしそうになった時、結祐から思いもよらない話を振ってきた。

「なぁ、梓。好きな人いる？」

「ぶっ！！なんで急にそんなこと！？」

「別に大した意味はねーよ。ただ幼馴染として梓の恋模様は把握しておく義務が――――」

「無いっ！！」

「ははっ。軽い冗談だって」

全然重たいよ・・・。

私はそう思いながら、今日を振り返った。

今日は練習して、笑って、笑って、笑って・・・・・結局あんまり練習してない気がする。

「ねぇ、結祐」

「なに～？」

「結祐は何で軽音部を続けてるの？やる気の無い部なのに・・・・」

そう言ってから、はっと我に返った。

私とんでもないこと言ってる！

そう思いながら恐る恐る私は結祐を見た。

すると、結祐はもともと私がそう思っていたのも、そんな事を聞かれることも見通していたかのように軽く微笑んで答えた。

「俺は、あのメンバーが好きだから」

「え？」

「やる気はねぇし、お茶ばっか飲んでっけど、俺は引き込まれる演奏をするあのメンバーが好きなんだよ。理由はそんだけ」

「でも、ちゃんと練習しないんだよ？それなのに・・・・」

「まぁ、それはよくねぇとこだけど、俺はそれでもあのメンバーが好きなんだよ。きっと」

私には理解できなかった。

結祐には誰にも負けないような声がある。

きっと外バンでも通用する。
なのに、たったそれだけの理由で軽音部にいる意味が私には分からなかった。
「梓には、ちょっと分かんなかったかもな」
そう言って結祐はニヤッと笑った。
結祐には何でもお見通しだった。
「まぁ、あんま考え過ぎんなよ。俺でよけりゃあ何でも相談に乗るからよ！んじゃあな」
そう言って、結祐は右に曲がった。
その背中を私は見つめながら、思った。
結祐には私の事が見えるのに、何で私には見えないんだろう？
結祐には、あの部がどう見えてるんだろう？と。

## 第八話　?新入部員???（後書き）

次回は・・・・

『このままじゃ、来なくなっちゃうかもしれないぞ!!』

『（なんでこんなやる気の無い部にいるんだろ?）』

『それは先輩たちにしかできない。だから俺は――――――――』

次回【新入部員??】

## 第九話　?:新入部員?:?:?:（前書き）

超急展開＆スーパーシリアスです。

・・・会話を減らしてシリアス感出したつもりですが、どうですかね？

まぁ、なにはともあれ第九話、どうぞ！！

## 第九話　？新入部員？？？

またまたまたまたこれはいつもの登校風景。

ではなく、朝っぱらから緊急会議中だ。

「みんなよく聞いて」

部室に秋山先輩の声が響く。

俺は飛び入りで来たので分からないが、先輩たちの間ではメールで重要な話があるということが伝わっていたらしい。

じゃなけりゃ、平沢先輩と田井中先輩がこんなに黙ってるわけねぇしな。

「このままじゃ、梓は辞めちゃうかもしれないぞ！」

「「「えぇ！？何で！？」」」

見事にハモった。

っつか、今更気がついたんかよ・・・。

頼みますよ先輩。

「なんで！？なんであずにゃん辞めちゃうの！？」

「何でって、みんな分かってるだろ？」

「なんでだよ！？ユウ！」

「自覚してくださいよ・・・」

そう俺が言うと平沢先輩と田井中先輩はう～んと悩みだし。

悩み
悩み
悩み
悩み

そして出した結論は、

「「あ、梓（あずにゃん）の歓迎会してないや」」

？？？？？？

つーわけで今に至る。

「ほらぁ、あずにゃんケーキ美味しいよ～」
「梓ちゃんこれもどーぞ♪」
「えっと、その・・・・」

ここは学校からそこそこ離れたところにある自然公園。
何故なのかわ分からないが、そこでピクニック形式で『梓（ついでに結祐）の歓迎会』は開かれることになった。

・・・っつか、俺の扱いひどくね？

まぁ、でも俺のことはどうでもいい。
もっと言っちゃえばぶっちゃけこの会自体どうでもいい。

それよりも俺が気にかけていたのは、

「あずにゃん何が食べたい？」
「何でも言ってね♪」
「ネコ耳～」
「やめてくださいっ！！」

この先輩たちだ。

本当にやる気というものがあるんだろうか？
俺は別にこのままでもいい。
しかし、梓は違う。
このままじゃ確実に辞めてしまう。
そのための緊急会議だったはずなのに・・・。
重ねて確認する。
この先輩たちにやる気はあるのだろうか？
そう思わざるを得ない状況だった。

だが、俺に何か言う権利は無い。
俺は梓にこの部にいてほしい。
それはショートしないとかそう言うのじゃなくて、この部のためにもいたほうがいいからだ。
でも、この部は先輩たちが築いてきた軽音部だ。

秋山先輩は一昨日、俺に思ったことを普通に言って欲しいと言ってたが、俺にはやはりできない。
それはやはり、先輩たちの軽音部だからだ。

と、かっこつけてみたものの、本当は違う。
ただ、『俺のせい』でこの部がおかしくなってしまうのを恐れて

いる。

・・・・結局『自分のせい』になるのが怖いだけだ。

だから今も、黙っている。

俺は、大バカだ。

?.?.?.?.?

私の歓迎会と言っていたけど、先輩たちは私よりもめいいっぱい楽しんでいた。

今はフリスビーを投げ合って遊んでいるし。

だから、今私は一人でそれを眺めている。

結祐と話していようかな?とも思ったけど、今日の結祐はなんだか難しい顔をしてた。

何か思いつめてるんだろうな。

心は読めないけど、表情に出ているから分かった。

「はぁ。つまんないな・・・」

そうなんとなく呟いたとき、私は先輩たちの輪の中に澪先輩がいない事に気がついた。

どこだろ?

そう思って周りを見回すと木陰で本を読んでいるのが見えた。

「(そう言えば、澪先輩ってうまいのに何でこんなやる気の無い部

にいるんだろう？）」

そう思いながら澪先輩をじぃ～っと見ていると、澪先輩がそれに気がついた。

「どうしたの梓？」

「あ、いや・・。澪先輩は外バンとか組まないのかな～って・・・・」

「あ～。外バンもいいよね。でも――――――――」

そう澪先輩が言おうとした時、

「いいのかなぁ～？そんな事言って。こっちには澪のあんな写真やこんな写真が・・・・」

「やめて！返して律！！」

そっか。

澪先輩は弱み握られてるのか。

と、私は澪先輩と律先輩を見ながら笑っていた。

・・・あれ？

私笑ってる？

こんなやる気が無い部、つまらないと思ったのに。

思えば、期待はずれな事が多かった。

入部してもうんざりすることばっかりだった。

でも、私今みたいに笑ってた気がする。

私、どうしたいんだろ？

？？？？？？

時は夕方。

歓迎会という口実で十分に遊び、俺たちは公園を出ていた。

「あー楽しかった」

「そうね～」

「次はどこ行く？」

「温泉とかもいいわね～」

途中から参加した山中先生と先輩たちはそんなことを話していた。

梓は、ずっとうつむいていた。

それを見て、俺の疑問は１８０。回転して怒りに変わった。

拳を強く握りすぎて、爪が皮膚にめり込んだのが分かった。

痛かったが、それでも怒鳴ってしまわないために握り続けるしかなかった。

そう俺がイライラしていた時、ついに秋山先輩が言い放った。

「みんな！！」

「「「「え？」」」」

「明日は絶対絶対絶対絶対練習するからな！！」

「あ、・・・・うん」

「絶対の絶対の絶対だからな！！」

秋山先輩のその言葉でその日は解散になった。

？？？？？

それから数日。

梓はめっきり部活に来なくなった。

先輩たちは約束通りしっかり練習していたけど、来なかった。

多分外バンでも回ってるんだろ。

俺は最初の疑問の状態から２７０。回転して冷静になった頭でそう推測した。

「梓こないな・・・」

「もう来ないかもしれないな」

「あずにゃんもう来ないの！？」

「かもな・・・」

「りっちゃんもそう思うの？」

「まぁ、そう思いたくないのは山々だけど、澪の言う通りかもしれないしな」

「そうね・・・」

「ムギちゃんも！？」

「もう三日目だもんね・・・・」

「そんなぁ・・・・・」

先輩たちも後ろ向きになってしまった。

・・・今更になって何後悔してんだ俺。

しょうがねぇって、梓の道だし。

『俺のせい』にはなりたくなかったし。

「あずにゃん、辞めちゃったのかな・・？」
「もしそうだったら私たちにはもうどうにも出来ないな」

その一言が引き金だった。

本当に俺たちは何もできないんだろうか？
確かに梓の気持はこの部から離れてしまったかもしれない。
でも、まだ、間に合うかもしれない。

そう思うと俺は止まらなかった。

「諦めるんすか？」

「え？」
「まだ、諦めるには早いと思います」
「でも、梓ちゃんはもうずっと来て無いのよ？」
「それでも、辞めたって決まったわけじゃない。俺は梓とはこの数日間話してないけど、それでも、まだ辞めては無いと思います」
「ユウが何でわかるんだよ？」
「思いつめた顔してたからです。・・・・俺は本当は梓が初めてこの部室に来た時からこうなることを懸念してたんです。でも、結局梓の背中を押してやることも先輩たちのストッパーになることもできなかった。それで今凄く後悔してます。先輩たちだってそうでしょう？もっと早くから真面目に練習すべきだった。そう思うでしょ？」

俺の問いかけに反対する先輩はいなかった。

俺は心の片隅で、ついにやっちまったと思った。
先輩たちに自分の考えを押しつけてしまっていると自覚した。
梓の、梓が決めた道を潰そうとしているかもしれないことも自覚した。

それでも、俺はもう止まりたくなかった。

「じゃあ、今からでも梓をこの部に引きとめましょうよ。梓が外バンを組んでいたりしたらアウトだけど、まだそうときまったわけじゃないんだから」
「でも結祐。梓は私たちと一緒にいて、呆れて来なくなっちゃったんだよ？今更頑張るからって言ったって・・・・」
「そんなこと言わなくたって、先輩たちにはあるじゃないですか。精一杯の思いを伝える方法が」

俺はそう言いながら、拳を強く握った。
結局俺は何もしていないからだ。

人の心を惹きつけるこの音楽を俺も奏でてみたい。
そう思って入部したのに・・・。

でも、俺はこらえた。
自業自得だと。
だって、俺もお茶飲んで笑って、楽器にも触らずにここまで来ちゃったんだから。

「梓は、先輩たちの新歓聞いて感動して入部したんです。だから、その感動をもう一度呼び起こして、それから言葉で伝えればいいじゃないですか」
「・・・ゆーくん。でもあずにゃんは来ないかもしれないんだよ？」

「一時間後です」
「え？」
「今からきっかり一時間後。俺がここに梓を連れてきます。だから演奏できるように、伝えたいことを伝えられるように準備しておいてください」

俺がそう言うと、先輩たちは互いに目を合わせた。
そして、小さくうなずいた。

「分かった。でもユウ。梓がどこにいるのか分かるのか？」
「分かりません。でも演奏は先輩たちにしかできない。だから俺は俺のできることをやるんです」

そう言い捨てて俺は部室を出た。

後ろからは”じゃあ頑張るか！””おーーっ！！！”と聞こえた。

**第九話　？新入部員？？？？（後書き）**

次回は・・・・

『今の梓はそれと一緒だと思う』

『私、分からなくって・・・・・』

『でも、それも必要な時間なんだよ』

次回【新入部員？？】

ついに、梓編クライマックスです！！

# 第十話　　？新入部員？？？？（前書き）

新入部員編クライマックスです！！

どうぞ！！

## 第十話　　?新入部員???

「ぜぇ・・ぜぇ・・辛い・・暑い・・」

そう呟きながら俺は走り回っていた。
学校をでてから２０分。
梓の家には行ったが、梓はいなかった。
更に携帯の電源まで切っていた。

どこにいるんだよ?
そう思いながら俺は走った。

そして、梓の家から５００ｍほど離れた公園に差し掛かった時。

そこでふと思った。
俺はどこへ走ってるんだ?

目的地も無く走っても無駄に時間を潰してしまう。
考えるんだ。
梓ならどこに行くだろう?

・・・・・んなこと知るかぁ!!!

「はぁ・・。大見え切ったのはいいものの、肝心の梓の居場所がわかんねぇんじゃな・・・・」

そう言いながら俺は公園のベンチにドカっと座った。
そして再び考えた。

でも、

「さっぱり分からん。いくら幼馴染でも行動パターンまで読めねぇっつの」

俺はベンチを殴った。

痛かったが、自分の不甲斐なさからくる怒りを鎮めるにはそうするしかなかった。

・・・・だけど、ちょっと強くやりすぎたっぽいな。

そう俺が右手をさすっていると、ポケットの中で携帯が震えた。

梓か！？

そんな期待を胸に携帯の画面をタッチした。

すると、画面に表示されていた名前は、

「『篠原勇利』・・・。何の用だよ？」

俺は切ろうかとも思ったが、なにも事情を知らない勇利に当たるのはよくないと思い、電話に出た。

「こちら邑園結祐。取り込み中なので用件を１５字以上３０字以下でさっさと言え」

『え？３０字以内？え～と、吾輩今駅前の公園にいるんだけ「３０字以内つったろ」数えてたのかよっ！？』

「うっさいな～。用件は何だよ？早く言えよ～」

『結祐が言わせてくれないんだろ！！』

「そうだっけ？」

『そうだよ！！もう、いいや。それより大変なんだ！！』
「お前の一人称のバリエーションが増えたか？」
『違うよバカ！！梓が公園で落ち込んでるんだよ！』
「・・・マジか？」

そう言いながら、俺は走り出していた。

『マジマジ！大マジ！これってあれかな？声掛けて励ましたらフラグ立つパターンかな！？』
「残念だがそれはねぇ。それより勇利、お前を俺の親友と見込んでお願いがある」
『親友って言われちゃ断れないなぁ～』

扱いやすい奴だ。
ま、でも今回に限っちゃホントに勇利と友達でよかった思ったけど。

「そ、そのまま梓を見ててくれ」
『いいけど。なんか結祐、息切れてない？』
「は、走って・・・・るからな」
『そっか～・・・・。はっ！！まさか俺に見張りさせといて自分はフラグ立てる気か！？ずるいぞ！！』
「ち、げぇよバカ・・・。梓は・・・・俺、が連れてかなきゃ・・・なんねぇんだよ。け、軽音部として！！」
『・・・・そっか。軽音部として、か。分かった。結祐が来るまで梓は俺が見ておくよ』
「恩に着る。勇利」

そう言い捨てて、俺は携帯電話をポケットに突っ込んだ。

タイムリミットまで残り３０分。

？？？？？？

「ユウはああ言ってたけど、何やればいいんだ？」
「う～ん・・・。新歓と同じものだとすると、『ふわふわ』か『ホッチキス』かな？」
「そうだね～。でも練習してたのって『ホッチキス』だから、『ホッチキス』がいいんじゃない？」
「そうだな！！じゃあ『ホッチキス』やるか！！」
「「「おーーーーっ！！」」」

残り２５分。

？？？？？？

「結祐こっち～」
「ぜぇ・・ぜぇ・・」

タイムリミットまで残り２０分。
俺は勇利が待つ駅前の公園にたどり着いた。

「梓は・・・・？」
「そこのブランコ」

そう勇利が指差した先には確かに梓がいた。

その背中はとても小さく（もとから小さめの体格だけど）見えた。

「・・・梓」

「何やってんだよ結祐？男見せてこいよ！」

そう言って勇利は俺を押し出した。

その時勇利の顔がいつもより弱々しかったが、今はとにかく梓だ。

「・・・・よう梓」

「結・・・・祐？」

「どうして部活こねぇんだ？」

「そ、それは・・・・」

そう言いながら梓は俺から目を逸らした。

唐突過ぎたか？

でも時間がねぇし、何より俺も言いたいことがあるしな。

「今まで何してたんだ？」

「外バン回ってた」

「何で？」

そう俺が聞くと、急に梓が泣きだした。

なんかヤバかったか？

そう思って勇利を見たが、勇利はもういなかった。

ただ、勇利だけでなく公園付近に人がいなくなってたのは幸いだった。

こんな光景見られたら俺は色々誤解されちまうしな。

そう俺がちょっと困った表情をしながら頭を掻くと、梓が涙を拭きながら言った。

「分かんなくって・・・」

「どうして軽音部に入ったかが？」

「うん。何であんなにライブで感動したんだろうって・・・・」

梓は涙を袖でまた拭った。

そして、うるんだ目で俺を見た。

その目は俺に答えを求めていた。

だけど、俺は梓と同じ考えじゃない。

だから答えを出してあげることはできない。

それができるのは、感動を与えることができる先輩たちと、梓自身だけだ。

俺にできるのは、背中を押すだけ。

だから、俺は一つ話しをすることを決めていた。

不器用だから、アドリブなんざ俺には利かない。

でも、俺が用意していた話は丁度この時のために用意したものだ。

だったら、後は言うだけだ。

「結祐・・・？」

「あ、あぁ悪い。ちょっと、いろんな事が頭をよぎってな。んで、なんだっけ？」

「私はどうしたらいいんだろう？って・・・・・」

「ごめん。それはわかんねぇ」
「・・・・え？」
「だって俺は梓じゃねぇし。バカだからわかんねぇモノはわかんねぇ」

梓はそれを聞いて、またうつむいてしまった。

・・・・ちょっと、ストレートすぎたか。
でも、後には戻れねぇ。

「あのな梓」
「・・・・なに？」
「昔の中国にな、大事に大事に育てられた皇帝がいたんだよ」

そこまで言って、ちらっと俺は梓を見た。
すると、あまりに唐突過ぎた話に梓はぽかんとしていた。

でも、俺は続けるしかない。
臨機応変に女子と接する術などないし、この話だけはちゃんと伝えたかったから。

「その皇帝はな、残酷な世の中を見せないために大人になるまで一歩も部屋から出してもらえなかったんだ。
ただ、皇帝の親もさすがに可哀想と感じたのか、その部屋には世界中の絵師が描いた美しい外の街の絵を沢山飾ったんだ。
んでな。その皇帝はその絵たちを見て外の世界はどれだけ美しいのだろうって期待を膨らませながら大人になったんだ。
でも、実際の世界はそんなに美しくなかった。
街は絵よりも荒んでいたし、人々の中には絵の中の元気な人とは似ても似つかない人もいた。

皇帝はそれを見て、ひどく落ち込んでしまった。
そんな話があるんだけどさ。俺、ちょっとだけその皇帝と今の梓は似てると思うんだ」

梓はうつむいたまま聞いていた。
表情は見えないので俺には梓がどう思っているのか分からない。
でも、自分の名前が急に出てきたときかすかにだがピクリと動いた。
ただ、その動きが気を悪くしたことをあらわしているのか、それとも単純に驚いただけなのかは分からない。

「気を悪くしたんなら謝る。でも考えてみてくれよ。皇帝はさ、ずっと美しい絵を見て育った。だから、皇帝の中では『美しい街』が常識だった。梓も状況は似てないか？」
「・・・・・」
「梓はずっと親父さんや良いバンドの演奏や練習風景を見てきた。だからそのバンドたちの『日常』が梓の中のバンドの常識だったんだよ。練習は毎日きっちりやる。もっとまじめにやらなくてはならない。とかな」
「・・・・・」
「でも、あの軽音部は梓の常識とはかけ離れていた。だけど梓は感動してしまった。だから梓は困惑してんじゃねぇか？」

それで、俺の用意していた話しは終わった。
あとは、話しが梓の心に響くのを願うのみだ。

そう俺が緊張していると、梓がやっと顔を上げた。
その顔は涙こそ流れていなかったが、まだ困惑していた。

「確かに結祐の言ってることはあってるよ。でもどうすればいいか

分かんない。演奏している姿は私の目指すバンドかもしれないけど、普段は私の目指すバンドじゃない・・・・。そんなことは私だって分かってるよ！でも、だからどうするかがわかんない！そこまで言うなら結祐教えてよ！私はどうしたらいいの！？」
「だから。それはわかんねぇって」
「分かんないって・・・・。あれだけ長い話までしといて・・・？」
「あぁ。分からん。でも、もう一度考えるチャンスを手に入れる方法なら分かる」
「もう一度・・？」
「あぁ。要はもっかい感動する方法ならってことだ」
「どうやって・・・？」
「簡単だろ？もっかい先輩たちの演奏を聴きゃあいい。それでもう一度考え直せばいい。自分が思ってることがあんなら、きちっと伝えればいい」
「でも今更・・・先輩たちだって怒ってるだろうし」
「怒ってねぇよ。大丈夫。だから行こうぜ。向こうだって梓に伝えたいことがあるはずだって」

そう言って、俺は梓の手をつかんだ。
抵抗は無かった。

「さぁ、行こうぜ。伝えたいことは言わなきゃ伝わんねぇ。だから、な？」

俺がそういうと、梓は小さくうなずいた。

後は、学校へ戻るだけだ。

タイムリミットまで１０分。

?.?.?.?.?

ついに約束の時間になりました。
私たちは、練習を終え準備は万全でした。
でも、

「あずにゃんとゆーくん来ないね」
「しょうがないよ。もともと、結祐だって梓の場所を知ってたわけじゃないんだから」
「・・・ユウ。来るかな？」
「結祐くんはきっとくるよ！・・・・きっと」

ムギちゃんのその言葉を最後に会話は途切れました。

・・・ゆーくん。
約束は守ってくれるよね？

私が丁度そう思った時でした。

ガチャ・・・・
扉が開きました。
そして、入ってきたのは、

「あずにゃん！！」
「梓！！」

「梓ちゃん！！」

あずにゃんでした。

思わず私は抱きつきました。

「あずにゃ～ん。よかった～」

「それより、梓。なんで部活に来なかったんだよ？」

りっちゃんがそう聞くと、あずにゃんはボソリと言いました。

「わかんなくなったんです」

「え？」

「何であんなに新歓ライブに感動したのか・・・・」

「梓・・・・」

「一緒にいればわかると思ったんです。でも・・・・わからなかった」

あずにゃんはそう言いながら大粒の涙を流しました。

あずにゃん、そんなに思いつめてたんだ・・・。

私はどうすればいいのかわからなくなりました。

その時、りっちゃんが言いました。

「じゃあ、その感動を呼び起こそうぜ！もう一度梓が自分の気持ちを確認できるようにさ！」

そうだった。

私は、私たちは、そのためにあずにゃんを　　呼んだんだった。

気持ちを音にのせて伝えるために。

「そうだな。そのために練習したんだしな！」
「うん！そうだよね澪ちゃん、ムギちゃん」
「うん。そうね♪さぁ梓ちゃんは座って」
「・・・はい」
「んじゃいくぞ！！1，2，3，4ーーーーーー！！！！！」

?.?.?.?.?.

♪～♪～♪

やっぱり外バンには及ばない。

?.～?.～?.

律先輩のドラムは走り気味だし、

?.～♪～?.～♪

唯先輩はまるで音楽用語知らないし、

♪♪♪～

なのに、

?.?.?.～

そこに澪先輩のベースとムギ先輩のキーボードが加わると、

?♪?♪~♪?~

何でこんなに感動する演奏になるんだろう？

?????

「ねぇ梓」

「・・・？」

「いつか、私に外バン組まないのかって聞いたよね？」

「はい」

「確かに外バンも魅力的だよ。でも、お茶ばっか飲んでても私はこのメンバーが好きなんだよ。それに・・・」

「それに？」

「きっと、それも必要な時間なんだよ」

それを聞いて梓は涙を袖で拭って、こう言いった。

「やっぱり私、先輩たちと演奏したいです！！」

?????

その言葉を聞いて俺は廊下でホッとしていた。

同時に固く決意した。

俺も早く本当の『軽音部員』に、音で伝えられる演奏者にならなくちゃ、と。

## 第十話　　?新入部員???（後書き）

次回は・・・・・

新編始動!!

次回【役割?】

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7609z/

K-ON <Backroom Story>

2012年1月14日03時45分発行